宗教心理学研究会ニューズレター

第25号　2017.1.31

宗教心理学研究会

Society for the study of psychology of religion

目次

特集1:『宗教を心理学する』出版記念パーティー報告 ---------- 1
『宗教を心理学する』出版記念スペシャル対談＋出版記念パーティー
in 寺カフェ報告 ---------- 森本真由美 2
出版記念パーティーに参加しての雑感 ---------- 大橋　明 6
イベント参加記 ---------- 木村真利子 7
宗教心理学における「脱構築化」をめぐる一考察 ---------- クリーグ波奈 8
世界の平和は『宗教』に任せられるの？－出版記念パーティーにて考えたことー --- 酒井克也 10
2016年7月28日（木）『宗教を心理学する』出版記念イベントに参加して ---------- 橋本広信 11
出版記念イベント体験記－参加者からの感想－ ---------- 濱野佐代子 12
特集2:『宗教を心理学する』を書評する ---------- 14
宗教社会学の立場から ---------- 小池　靖 14
宗教心理学の新たな可能性 ---------- 小泉晋一 18
「宗教を心理学する」から宗教心理学を考える ---------- 渡辺俊彦 25
事務局からのお知らせ ---------- 29

特集１:『宗教を心理学する』出版記念パーティー報告

宗教心理学分野において，2011 年の『宗教心理学概論』に続き，2016 年 7 月に『宗教を心理学する』が刊行されました。刊行にあたって 2016 年 7 月 28 日(木)に出版記念パーティーが開催されました。出版記念パーティーでは「出版記念スペシャル対談」も行われました。スペシャル対談では，通常の学会，研究会のシンポジウムとは異なるやりとりがなされ，ざっくばらんではありながらも，これからの宗教心理学を考えることにもつながる非常に有意義な場となりました。

今回のニューズレターでは，この出版記念スペシャル対談，出版記念パーティーを報告し，読者の皆さまに当日の雰囲気を味わっていただきたいと考えています。さらに参加した方々にも感想を執筆していただきました。参加者の感想からもパーティー当日の雰囲気，盛り上がりを感じ取っていただきたいと考えています。

『宗教を心理学する』出版記念スペシャル対談＋出版記念パーティー in 寺カフェ報告

森本真由美(白百合女子大学大学院)

話題の寺カフェで対談イベント＆パーティー

2016 年 7 月 28 日(木)に寺カフェ代官山で『宗教を心理学する-データから見えてくる日本人の宗教性』(松島公望・川島大輔・西脇良編著 誠信書房 7 月 20 日刊行)出版記念スペシャル対談＋出版記念パーティーが開催されました。

本書は調査結果を伝えるだけでなく,「日本人は無宗教ではなく, 宗教に対して自覚的ではない, 他の宗教を知らない, 関心がないだけであって, これまでとは違う光の当て方をすれば, 日本人はこんなにも宗教および宗教にまつわる事柄との関わりがある, それが身近に存在している」ことを描き, 日本人の宗教性を示すものです。当日は執筆者のご友人の方々から, 同時期に開催されました ICP2016 (国際心理学会議)のご参加を終えた研究者の皆さまも駆けつけ, 執筆者を交えた良き交流の時間となりました。

会場は浄土真宗本願寺派信行寺が運営する,「寺カフェ代官山」。気軽なお喋りの場として, カフェや坊主 Bar を開くお寺が各地に現れています。ご参加された皆さまには今, なぜお寺カフェが人気なのか？も併せてご体験いただけました。寺カフェ代官山は僧侶が毎日在店し, 仏教講座や腕輪数珠づくり,「お坊さんと語ろう」(お悩み相談)などの対応をしています。「仏教を皆さまにとってもっと身近なものにしたい。その為に街に出た, 皆さんの悩みやお話を聞くために街に来ました。寺カフェは現代の人々のいわば駆け込み寺。気軽に寺カカフェにお話に, まずは遊びにいらしてください。」パーティーのオープニングは, 三浦性暁僧侶から寺カフェ代官山誕生のお話をお伺いいたしました。定期的に行われる「坊主 Bar 」(予約制)は, 予約がすぐにいっぱいになってしまうほど人気なのだそうです。

三浦僧侶のお話の後, 誠信書房の松山様の音頭で乾杯を行い, お食事をしながらの和やかな歓談の時間を過ごしていただきました。また当日は,『宗教を心理学する』の著者割引販売も行われ, またたく間に完売となりました。

出版記念スペシャル対談

『世界の宗教心理学と日本の宗教心理学の新潮流を語る』

出版記念パーティーでは, スペシャル対談として「宗教, 宗教性, スピリチュアリティ」の定義の変遷について踏まえたうえで日本の宗教心理学の課題や日本宗教心理学への注文という内容で Takahashi Masami 先生(イリノイ州立ノースイースタン大学)の問題提起に, 松島公望先生(東京大学)が応答する形で進められました。そして, 日本では今後どのような展開が必要であるか, 松島先生より新たな連携・協働の提言, 川島大輔先生(中京大学)からは宗教心理学だからこその可能性を探る, 方法論の提言がされました。併せて宗教心理学の可能性とデータの共有が宗教心理学の発展に繋がることが Takahashi 先生から改めて確認され, 松島先生より, 今後の日本宗教心理学会への設立準備や『宗教心理学研究』の刊行などへのビジョンが示されました。

スペシャル対談は,〈世界の宗教心理学と日本の宗教心理学の新潮流を語る〉と題して, 店内のスクリーンにパワーポイントで資料が提示される中, 1時間以上に及ぶ熱い対談, ご参加された研究者の方々との討論が行われました。紙面にてその一部をご紹介いたします。また, ICP2016 シンポジウムでのご発表への反響についても, 酒井克也先生(出雲大社和貴講社)からのご報告がありました。

◆問題提起『宗教, 宗教性, スピリチュアリティ』について(Takahashi Masami 先生)

スピリチュアリティの現状と課題として,「スピリチュアリティ」と「宗教」の概念的関係が挙げられる。さらに, 応用研究の先走りや「スピリチュアリティ」「精神性」「霊性」などの概念の曖昧さが指摘される。

改めて宗教心理学はどのような研究分野か？理論としての西田幾多郎に代表される宗教哲学，J.ピアジェや E.H.エリクソンなどデータを扱う心理学，その接点として C.G.ユングや W.ジェームスの名前が挙げられる。宗教学と心理学との接点が改めて問われる。

◆応答としての問題提起『欧米の宗教心理学の脱構築』へ（松島公望先生）

宗教心理学の欧米（特にアメリカ）の定義づけは「ユダヤーキリスト教文脈」に依存している。全てをそこから論じようとしている点に問題があるのではないだろうか？例えば研究会で，“Handbook of the Psychology of Religion andSpirituality 2nd edition（ Paloutzian and Park　Eds：2013 年 5 月刊）“を輪読する勉強会をやっているが，この中に書いてあることもユダヤーキリスト教文脈に依存しているというような，すべてをそこから論じようとしているようなことが挙げられる。アジアだったり，もしくはヒンズーであったり，イスラムについて論じていても，結局，研究の視点や枠組み，パラダイムが常にアメリカの，そしてユダヤーキリスト教文脈から離れていかない。

そこで日本ならではの捉え方・考え方をしていく必要があるのではないか。宗教の考え方をより広く見ていくこと，宗教性，そして研究対象の明確化を提案したいと思う。それが科研費での，〈 J-MARS ：宗教性・スピリチュアリティの多次元分析プロジェクト（ Japan　Multidimensional Assessment of Religion and Spirituality ）〉というプロジェクトで，『宗教を心理学する』視点は，宗教の捉え方をより広く見ていくこと，研究対象の明確化の提案をしている。

欧米の宗教心理学の脱構築により，新たな視界が広がっていく。例えば「宗教（教団）」ではなく視点を変えて，「宗教性」の構造から捉えてはどうだろうか。継続的に何かを信じるという行為がなければそれは宗教ではない，と考える人が多いが，宗教性において信念は一次元でしかない。宗教に関わる事柄について，知り，信じ，感じ・体験し，行動する。そしてさらに報酬と責任という効果を得ると考える「宗教性」の枠組みから考えると，信念というのも一つの次元に過ぎない。

「宗教の捉え方をより広く見ていくことは，宗教を宗教教団のみで見るのはやめませんか？」ということで，「宗教性から見てはどうか」という提案である。一神教でない，多様な宗教というのも見ていくと新たな視点が広がっていくのではないだろうか。言い換えると人間の営みとしての宗教，人がどのような形で営んでいくのかを見ていくことによって，キリスト教を中心とした見方ではない,新たな提案を日本からすることが出来るのではないか,と考えている。

◆日本は今後どのような展開が必要であるか？ー①日本からの提案　日本の宗教心理学の新潮流（松島公望先生）

では実際に日本ではどのように展開していくのか。どのような形で研究を進めていくのか。今後，日本においては 宗教学，神学，哲学，倫理学といった「概念」，心理学，社会学，老年学といった「実証」，医療，看護，介護，福祉といった「現場」の連携と協働が必要である。それぞれの領域に出来ること，その領域にしか出来ないことがある。まず私たち心理学からこの新たな連携・協働を提案したい。

そして，日本における実証的宗教心理学的研究から，海外へ発信していく。ちょうど今，ICP2016 という4年に1回の国際心理学会議が横浜で開催されていて，ユダヤーキリスト教圏の人たちも含めて,「日本はどうなんだ」って日本からの発信みたいなことを海外の人たちも期待している。今回の ICP2016 シンポジウムの手応えから，日本にはそれだけのメッセージ性や資源があると実感した。

◆ ICP2016 シンポジウム報告（酒井克也先生）

日本の神道は宗教ではない，というのが世界のコンセンサスみたいになっている。非常に原始的で，教義も教典もない，そんなの原始的な信仰のなごりでしょ，みたいな感じで，神道は宗教学や宗教心理学ではあまり取り上げられることがない。それはなぜか？「ユダヤーキリスト教文脈で語っているからに過ぎない」ということで，「日本のこんなに豊潤で豊かな心を醸し出している神道をきちんと宗教心理学のまな板の上に乗せようではないか」と声をかけていただき，科研費の調査に参加させていただいた。

そして今回，ICP2016 に参加して，世界中の人の前で神道を説明したことで，もしかしたらこれから日本の神道のベースにある物語性みたいなものを，世界に発表して，それが世界平和に少し貢献できたら，面白いことになるかなぁと感じ，そんな取り組みをしていきたいと思っている。

◆日本は今後どのような展開が必要であるのか？－②方法論的（心理学研究法）的な提案（川島大輔先生）

実証性というものをどう受け止められているか。言葉に置き換えないと報告が出来ないが，例えば英語の文化圏に置き換えたときに，普段日常的に慣れ親しんでいる言葉や感覚としてそのまま伝わっているとは思えない。英語に置き換えることによって，何かが失われる。

「脱構築」と言ったとしても，当然学問なので，アメリカの文化であれば，そこに慣れ親しんでいる人に，届くような言葉で語らないといけないが，日本の我々が本来感じているかもしれない素朴なものから離れていってしまうというのがあると思う。

それはどっちかがいいという話ではなくて，そこを大事にしていくべきではないかと。実証ということは大事だけれども，我々がどういう言葉を使うかという，言葉に関心をもってやる質的な研究の手法がある。この『宗教を心理学する』でも何章か，実証という言葉は出てこない。研究の在り方として，実証性というのはすごく大事だと思う。でもそれだけではないというのがあって，あるいは数字に置き換えたときに，そこから落ちるものもある。

『宗教を心理学する』では，質的な研究の視点もぜひ見ていただきたい。

◆日本は今度どのような展開が必要であるか？－③海外からの提案　世界の宗教心理学の新潮流（Takahashi Masami 先生）

欧米の宗教心理学からの脱構築と言っても外せないのが，データの共有である。欧米ではオリジナル研究とその相違点（手法・被験者の特性等）の批判や問題点が浮き彫りになってきている。何か研究を行って，もう1回やり直すのをレプリカ研究というが，その場合，だいたい 36 %しか同じ研究結果が出ない。そこにすごいギャップがある。課題として，有意差結果の優遇や手法の事前受付，透明性などが挙げられる。

情報開示法というのが出来て，全米心理学会がデータ開示を奨励しているように，データ開示の義務と必要性が，今後ますます問われるようになってきている。アメリカやヨーロッパで研究をしている人たちにとっては，データの開示は常識になっており、誰かが集めたデータはすべて知りたい人に開示するような方向である。

今回，科研費で行った『宗教を心理学する』の大きなプロジェクトでは，7000 人からなるデータを取ってきたわけだが，日本の場合はそのデータを積極的に開示しようとはしない。科研費は日本の科学を奨励するお金で，元々は税金で賄われている。例えば，僕たちが税金を払っている研究で集めたデータを，なんで僕たち税金を払っている人たちに共有しないんだということもある。データの透明性は，今後日本の科学の分野で必要とされる時代が来るんじゃないかと。日本においても，宗教心理学研究が先駆者となって，データの開示を進めていってほしい。それが波及して科学の復興につながっていくのではないかと思う。

◆今後の展開 … その先にあるもの（松島公望先生）

世界ではデータ開示の流れがある中で，日本はそこが遅れている。心理学はデータというのが肝になるわけだが，だからこそデータをどのような形で開示していったらよいか，そして世界に流れの中で私たちが取り組んでいることをどう発信していくのかを考えなくてはいけない。

世界の流れを考えたときに，私たち宗教心理学が新しいうねり，流れを作っていくという取り組みとして，2つのことが課題として挙がってくる。

まず1つは日本宗教心理学会の設立である。宗教心理学研究会の会員が 90 人弱で，だいだい 100 人を超えると学会としての機能が出来ると言われている。1つの目安かもしれないが，やはり発信力を高めていくためには，学会設立を考えていく必要がある。

2つめは『宗教心理学研究』の刊行である。宗教心理の研究をしても投稿先がない。そこで，日本初の宗教心理学に関する学術誌の刊行というようなことも考えていくことが，研究全体を広げて

いくことに繋がっていくのではないかと思う。

そして個人的には，世界と渡り合える「土台」を作っていくため，日本の宗教心理学は「坂本龍馬」として立ち回っていくことを期待したい。なかなか宗教心理学をメインにやろうという人が集まらないが，坂本龍馬のような形はあるかな，と考えた。薩長連合を作ったような，いろいろなところの繋ぎ役になる。そのような形で，宗教心理学が機能していったら，そこがひとつの要になって，いろいろな展開に広がっていくのではないだろうか。このようなビジョンをぜひ，今日お集まりの皆さまと共有していきたい。

◆質疑応答 Q&A

Q：宗教性はスピリチュアリティと言い換えて問題はないのではないか？

A：（松島先生）スピリチュアリティと置き換えても可能だと思う。スピリチュアリティというものに関して「知り，信じ，感じ・体験し，行動し，報酬と責任という効果を得る」というようなひとつの人間の営みとして，人間がどう立ち振る舞うのかという示唆から研究をしていくと，既存の枠組みからひとつ脱構築できるのではないかと考えている。

A：（ Takahashi 先生）僕はこの二つの概念は同じだとは思わない。例えばアメリカ心理学の 36 部門は宗教心理学に関する機関だが，その名称を 2012 年に「宗教と心理学」から「宗教とスピリチュアリティの心理学会（ Society for the Psychology of Religion and Spirituality ）」という名前に変えたり，刊行するジャーナルも “Psychology of Religion and Spirituality” とスピリチュアリティを雑誌名に加えたりと，スピリュアリティを全面に出している。スピリチュアリティというのを科学の概念として全面に出した方が，最初は抵抗があるかもしれないが，後には慣れてくるんじゃないかと思う意味も込めて，宗教心理学研究会も改名した方がいいんじゃないかとも思っている。

Q：実証レベルで，日本で宗教の研究の，よりバイオロジーとか，そのような動きとどのように連携していくのか？

A：（松島先生）文化を含めて，まず文化的な部分がユダヤーキリスト教的なところに覆われていると思われる。アメリカでも宗教ではないけれども，スピリチュアリティであるといいながら，このスピリチュアリティな人たちがユダヤ-キリスト教文脈から離れていない。常にそこから語っている。それというのは光の当て方だと思う。アメリカの研究者がそのような光の当て方をするのであれば，日本の研究者は日本の光の当て方をしてもよいのではないかと思う。それなら神道みたいな，宗教教団から離れた身近な存在，それも宗教ですよというように，私たちが定義づけして，発信していく。私たちはこれだけ豊潤な宗教性を持っている日本人というものに，光を当てて見ると，何か新しい動きというものを日本から発することができる。そのようなことを含め，私の中ではまず「日本」「日本人」といった文化的な観点から模索し，連携・協働を行っていき，その先にバイオジカル的な領域との連携・協働していきたいと考えている。

A：（ Takahashi 先生）英語圏とか西洋と一括して語るが，実はそうではなくてアメリカも北欧やヨーロッパにおける宗教の考え方は違いがある。もちろんユダヤ-キリスト教的な流れはあるけれども，キリスト教とユダヤ教ではまったく相容れないところもあるし，そういうところの多様性というのを見極めていかないといけないのではないかと思う。

Q：先生たちがなさっている研究が，医療や介護などの実際の現場で，何か生かされていることはあるのか？

A：（ Takahashi 先生）まず，終末期医療などがある。また ICP2016 で他国の研究者から聞いて面白いと思ったのが，宗教性やスピリチュアリティがどのように毎日の仕事に対する満足度に影響するか，仕事の効率や能力を上げていくようなものなど，産業心理学的な流れみたいな研究もある。

A：（松島先生）正直なところ，直接的な，というような形というのはなかなか難しい。様々な現場に向けて，何かを考える枠組みとか，見方を提供するという役割ができないかなと考えている。今回の『宗教を心理学する』の本を読んでいただいて，こんな見方があるんだ，これを活

かそうというのがあれば，我々としては何か成果が出たのかなと思う。

記念イベント＆パーティーを振り返って

同時期に開催されました， ICP2016 シンポジウムの手応えを「日本宗教心理学の可能性」として，大いに盛り上がった『宗教を心理学する』出版記念スペシャル対談＋出版記念パーティー in 寺カフェ。出版記念パーティーにご参加出来なかった執筆者の先生方からお送りいただきましたメッセージも，出版パーティーを温かく盛り上げました。

最後に，出版記念イベント＆パーティーの準備をお手伝いさせていただき，色々と学ぶことが多く，有意義な体験をさせていただきましたことを御礼申し上げます。当日は司会・進行の役も仰せつかり，あっという間に時間が過ぎてしまいました。改めてスペシャル対談を振り返りますと，『宗教を心理学する-データから見えてくる日本人の宗教性』から，宗教心とスピリチュアリティやそれに関連する現象を心理学的に捉える，日本の宗教心理学の可能性の広がりと宗教心理学の研究の面白さが伝わってくることを実感いたします。

ご出席いただきました皆さまと分かち合えた時間はとても楽しいひと時でした。深く感謝を申し上げます。ありがとうございました。

出版記念パーティーに参加しての雑感

大橋　明(中部学院大学：非会員)

誠信書房さんより『宗教を心理学する』が出版されましたこと，またその記念パーティーのご盛会，誠におめでとうございます。このたびさまざまなご縁でパーティーに参加させていただきましたが，大変楽しく，好奇心がかき立てられる集まりでした。

今回のパーティーは「寺カフェ代官山」で行われました。会場は大きなお寺の近くにあるのだろうと思っておりましたが，小洒落たカフェが大きなビルの 1 階にありました（代官山という場所を知らない田舎者です）。一風変わっているのは外には五色幕が張られ，中にはご本尊がいらっしゃるところでしょうか。私自身は寺カフェや坊主 Bar の存在にはあまり感心しない立場だったのですが，このような場での飲食や会話もよいなと「宗旨替え」を検討しているところです。

スペシャル対談は，高橋正実先生と松島公望先生，そこに川島大輔先生が乱入（？）という形で行われました。日本ではスピリチュアリティが流行りつつもそれは日本人の満たされなさに依拠していること，また定義が統一されていないのに応用研究だけが多くなっていくことで何を見ようとしているのかわからなくなっていること，欧米と日本とでは背景や宗教の立ち位置が異なるので欧米の知見等をそのまま日本に持ち込むことには問題があること，各々の宗教ではなく「宗教性」に焦点を当てる必要があること，宗教学などの理論と現場とのつなぎ役が「実証的宗教心理学」に期待されていること，などなどのお話がありました。ひとつひとつ首肯できることばかりで，非常に興味深く，また楽しく拝聴しておりました。

もちろん対談の内容について「う～ん，難しい！」とお感じになった方は私を含め参加者の中にも幾人かおられました。しかし，このような感想を初めてお目にかかった方と気ままに出し合い，いろいろとお話することができました。これも「不飲酒戒」でない集まりだったことが大きいように思います。

このようになんとも自由な会に参加させていただいて，次のようなことがふっと頭をよぎりました。

まず，教義・理論等を無自覚に受け入れるということはどの宗教・学問でも起こり得ると推察しますが，他者の批判に委ねる努力をしていきたいということです。宗教も心理学も見えないからこそ，人を惹き寄せ惑わせます。「このようなことが実証的に示されたからこうなのだ」と訴えることはよいのですが，自らの思考形式や姿勢，見出した

知見を「疑わない」ことにならないようにしたいと感じました。

次に，枠にとらわれない自由さを持ちたいということです。宗教家の皆さんが今回の会場であった寺カフェや坊主 Bar をお作りになるのは，宗教家の方が市井に住む人に直接関わろうとしておられるからかなと思っています。"いたみ"を抱える人たちに寄り添う臨床宗教師というお立場は，まさにこれに当てはまるでしょう。この集う場や役割が誕生したのは，これらを期待する一般の人たちがいらっしゃるからでもあるでしょうし，宗教家の方がこれまで自らを縛ってきた枠から自由になられたからかもしれません（自由さは本来あるべき姿かもしれませんが）。

今回のスペシャル対談で，新たな連携・協働を強く訴えておられたことが印象的でした。具体的には，宗教学や神学・哲学・倫理学といった「概念」，心理学や社会学・老年学といった「実証」，医療や看護・介護・福祉といった「現場」の 3 つがあること，ちょうど真ん中に位置する「実証」の立場にいる者が他の 2 つをつないでいく役割を果たすことを提案されました。他領域同士の橋渡しをするためにも，揺るぎない自分の土台を持ちつつ自由さを持てるようになりたいと感じました。

まとまらない感想でお恥ずかしい限りですが，素晴らしい空気に触れることができて本当に幸せでした。ありがとうございました。

宗教心理学研究会のますますのご発展と，会員の皆様のご活躍をお祈り申し上げます。

イベント参加記

木村真利子(立正大学大学院：非会員)

平成 28 年 7 月 28 日『宗教を心理学する』出版記念イベントに参加させて頂きました。私は宗教心理学研究会のメンバーではないのですが，研究会メンバーの方々を中心とした読書会に参加させて頂いているご縁で，イベントをご紹介頂き，参加させて頂くことになりました。現在は立正大学大学院の心理学研究科で，破壊的カルトにおけるマインド・コントロールに関する研究をしています。学部生の頃に宗教や信仰心への関心を持ち，大学院ではカルト的な宗教という限られた範囲を対象としていますが，読書会では広く宗教心理について学ぶ非常に有り難い機会を頂いています。

今回のイベントの会場となったのは，代官山にある「寺カフェ」でした。お坊さんがいらっしゃるカフェやバーの噂は耳にしていましたが，初めて伺うということでとても楽しみにしていました。「寺カフェ」は，お寺の要素がありながらもカジュアルでお洒落な雰囲気のある，なんとも不思議な空間で，唐揚げがとても美味しい，素敵な会場でした。

イベントが始まるころには，会場は席が埋まるほどの参加者が集まり，美味しいお食事とお酒頂きながら，タカハシ先生と松島先生の対談，質疑応答，執筆者の先生方によるコメントをお聞きしました。

タカハシ先生は，「スピリチュアリティ」という言葉に関する問題について解説して下さいました。日本での「スピリチュアリティ」という言葉は，多くはポップカルチャーの文脈の中で用いられてきたことから，欧米で使用されている本来の意味や学問上の意味と乖離していること，そして「スピリチュアリティ」と「宗教」との区別などについて伺いました。研究対象の明確化は避けては通れませんが，「スピリチュアリティ」はその点で厄介な問題を抱えているということで，改めて「スピリチュアリティ」，そして「宗教」という概念について考えさせられるお話でした。

松島先生は，欧米的見方のみによって宗教を論じることから脱却するべきであるということ，そして，宗教に関する実証研究は，宗教学などの領域における概念研究と，医療や福祉などの現場と連携していく必要があるというお話をして下さいました。特に，今回のイベントは様々な背景を

持った方々が参加されており，宗教が関わる領域の広さを感じさせられる場でもあったため，各領域との連携というご提言は非常にリアリティをもって受け止めることができました。また，私が関わっている破壊的カルトの問題においても，他の学問領域との立場の違いや，当事者（現場）と関わっていく重要性などを感じさせられることが多々あり，私自身も様々な立場との連携やバランスをとっていくことを意識していきたいと思いました。

一連のプログラム終了後は，参加者同士で懇談するお時間がありました。私も周りの参加者の方々とお話しさせて頂きましたが，老年学の研究者の方やキリスト教信者の方など，やはり様々な背景をもつ方がいらっしゃいました。個人的な話になりますが，このようなバラエティに富んだ参加者の方々を見て，私は大学2年生からの専攻選択に悩んでいた時期を思い出しました。当時，漠然と宗教に関することをやりたいと思っていたのですが，ほとんどどの専攻へいっても宗教に関わることが学べると思い，専攻を迷っていたのです。今回のイベントも，あの時と同じように，宗教の関わる領域の広さを感じさせられました。この裾野の広さ，人間に与えてきた影響の大きさは，私が宗教に興味を持った理由の一つであり，宗教の面白さでもあると思っています。

今回のイベントでは，日本で宗教心理学研究を進める上での実際的な問題から大きな枠組み的なお話までお聞きすることができ，その中から研究者の方々の熱いお気持ちを感じることができました。また，研究する上で難しい問題があることを感じた一方で，きっとこれから宗教や信仰心についてわかることが増えていくだろうというわくわくするような気持ちにもさせて頂きました。最後になりましたが，松島先生をはじめ，今回このような貴重なイベントをご準備下さった皆さまに，厚く御礼を申し上げます。

宗教心理学における「脱構築化」をめぐる一考察

クリーグ波奈（東京大学大学院）

2016 年 7 月 28 日に行われた「宗教を心理学する」出版記念イベントは，様々な意味で非常に興味深い集まりであった。ひとつには，仏教や神道，キリスト教などの信徒のみならず，それぞれの分野で教職の立場にいらっしゃる先生方が多くご出席されていたことである。特定の宗教に属さない方も多数いらっしゃったであろう。これほどまでに多様な信念，思いを持った人々が集まる会というのは非常にまれであり，こうした人々の持つ多様性がこのイベントを特別なものにしていた。しかし，そのなかでも特に印象的だったのは，その場に集っていた人々がその多様性を「認め，尊重する」というコミットメントを共有していた点であり，その重要性は強調してもしすぎることはないだろう。

二つ目には，終盤水口先生からの振り返りのお言葉にもあったように，たとえ異なる意見であっても 参加者それぞれが自由に発言することができる安全な場所として会が機能していたことである。 これは，前述の互いに「認め，尊重する」コミットメントがあってはじめて可能になることである。 全体としての和を乱すから，といった理由で発言をはばからなければならないような雰囲気がメディアのみならず社会全体にも広がっている昨今，この会においても，ひとりひとりの言論と思想の自由をしっかりと確保していくことが今まで以上に大切になっていくのではないだろうか。

このように互いを認め，尊重するという態度は学術的な討論を行う上で基礎となるものであり，これは自身も大学院の学びの中で日々感じていることでもある。そのようななか繰り広げられたいくつかの討論の中でも特に筆者の関心をひいたのは，松島先生の提案する「非西洋，非キリスト教のアプローチによる宗教心理学の脱構築化」と，それに抗する荒川先生のご発言であった。残念ながら当日は時間の制限により深い議論へと

は発展せず，両先生のご意見を詳細にうかがうことは叶わなかった。両先生方からは後ほどご教示いただくこととして，本稿では筆者なりに「脱構築化」という言葉の意味するところについて，浅学ながら考えるところを述べてみたい。

宗教を心理学という学術領域で取り扱うということは，「個人の宗教的信仰の起源，発達，それにその持続を扱うことである」とスコビイは述べ，心理学は宗教の真理やその妥当性に対して何ら語る言葉を持たないことを強調している(Scobie, 中村，& 山根，1996)。社会科学のパラダイムにおける純粋な客観性の存在をめぐっては多くの議論のなされるところであるが，人間の営みとして心理学という学問が成立してきている以上，宗教心理学もこの議論から逃れることはできない。これまで蓄積されてきた宗教とヒトの心理についての膨大な知識は一貫して，ユダヤ・キリスト教文化文脈に影響を受けた個人による，キリスト教を主とした一神教における理解に基づくいわば「ユダヤ・キリスト教心理学」の枠組みが構築されてきたといっても過言ではない。宗教一般を網羅すべき「宗教心理学」との看板を掲げながら，人と個人的な関係を結ぶ人格神，救い主の存在，選民思想や罪の概念などユダヤ・キリスト教特有の様々なアサンプションを不可避的に含んでいる。松島先生の「脱構築」という言葉裏には，そのような現状に対する批判が込められているのだろう。この場合，脱構築ということは即ち「脱ユダヤ・キリスト教心理学」である，と言い換えることができるかもしれない。

一方で，この脱構築という言葉をより大きな「科学のパラダイム」に対応する水準で用いるとするとどうか。宗教心理学という分野が，ヒトが普遍的に得る経験としての宗教と，現象のメカニズム解明を試みる科学としての宗教を含むものであるとしよう。経験としての宗教の枠を出ない形で議論をする場合，例えば二人の異なる宗教的背景を持つ個人が，それぞれの信念や世界観に基づいて互いに理解に努めようとするとき，同じ言葉が異なる意味を帯びているがために相互理解が達成されないことがある。「神」という言葉一つとっても，それがその個人にとって複数形なのか単数形なのか，どのような感情を抱くべき対象なのか，あるいはその「神」といかなる個人的体験をもつかによってその言葉の意味するところが大いに異なってくる。

しかし，これに科学としての宗教という枠組みを増し加えると，言葉に操作的定義を与え，明確な手続きを踏むことによって既存の研究に更なる示唆を加えていく，いわゆる「巨人の肩の上に立つ」形での研究発展がのぞめるだろう。宗教心理学の場合，主にこの分野は前述の通りユダヤ・キリスト教文化文脈を背景にもつ西洋の研究者によって先導されてきたという歴史から，後発の研究者たちは自ずとこのユダヤ・キリスト教を基にした知識，枠組みというものありきで議論を展開せざるを得ない。これまでのより大きな心理学の流れから現象を説明することには大きな利点があり，先発の西洋ベースの知見と，後発の東洋ベースの知見が相互理解を図っていく上ではかならず免れないステップであると考えられる。これは，すでに構築されてきた枠組み，即ちこれまで構築されてきたものに対してなんらかのアクションを起こさない限り，「脱」構築という次なるステップは現れてこないことを意味する。

心理学は，普遍的な人間の特徴の記述をめざす学問であるとも言える。共通点を指摘し，違いがあればそれがどのような条件で差異が生まれるかを詳細に記述する-このような心理学という学問のもつ大きな使命に照らし合わせると，非キリスト教文化文脈からの示唆というものは，特定の宗教内における一般性を扱うのであれ，あるいは宗教と呼ばれるもの全てに共通する普遍的な一般性を扱うのであれ，これからの分野の発展に必要不可欠であることは誰の目にも明らかであろう。

イベントで詳しく触れられることのなかった「脱構築」という言葉がどのような意味を持ちうるのか，また，それが示唆し得ることとは何なのかについて以上筆者の考えをとりとめもなくのべてきたが，先述のとおり，この議論はまだはじまったばかりであり，本稿だけでは全く以て不十分であることをまず申しあげておかなければならない。この度出版された「宗教を心理学する」をきっかけとして，「互いに認め，尊重する」ことで築き上げられる関係を礎としながら，今後のさらなる議

論の深化を期待している。

参考文献

Scobie, G. E. W., 中村昭之, & 山根はるみ. (1996). 宗教心理学. 大明堂. Retrieved from http://ci.nii.ac.jp/ncid/BN1473216X

世界の平和は『宗教』に任せられるの？
ー出版記念パーティーにて考えたことー

酒井克也（出雲大社和貴講社）

去る 7 月 28 日，東京・代官山の寺カフェにおいて，『宗教を心理学する』出版記念パーティーが開催された。代官山駅から，こじゃれたアパレルショップの並ぶ坂道を通り抜けて店に向かう間，あの熱い日々を思い出していた。「出版するならICPに間に合わせて，そこで紹介したいネ。そのあと出版記念パーティーやって多方面の人たちに知ってもらえばいいじゃない。」Masami Takahashi 先生の，あの無邪気な笑顔にはいつも癒される。記念パーティーとは，なんと「欧米」なことよ！と，こころの中でツッコミを入れつつ，ある意味「これは大変なことになる…」と予感したことを覚えている。だって僕は，出版原稿どころか，ICPの発表原稿さえ未完成だった（というか，ほぼ手を付けてなかった）のだから。でも，あの無邪気な笑顔にはなぜか「いいね」をしてしまう…。

それ以降の日々は，案の定「鬼のように」忙しくなった（忙しい鬼はあまり見かけたことがないが）。出版企画の原稿を川島先生に何度も何度もチェック＆修正していただき，不慣れなICPエントリー手続きをして，稚拙な英語で書いたアブストラクトは突き返され，何度も何度も Takahashi 先生にチェック＆修正していただき，とても勉強になったことも覚えている（こうして書くと，ほとんど甘えてばかりの勉強である。この場をお借りして，先生方には厚く御礼を申し上げます）。でも，僕らはやったのだ。ICP直前の出版！ICPでの英語での発表（しかも盛況）！そして今日の記念パーティー！ We did it ！

これは，いつもながら魂を半分引きずりながら完ぺきなコンダクトをしてのける松島事務局長の汗の賜物であることは言うまでもないが，ここで言っておく。今回は荒川歩先生や，会場の手配までして下さった森本真由美氏のご助力も忘れがたい。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。などと思っているうちに寺カフェに到着。皆さん早くからセッティングご苦労様です。受け付け？はい，お安い御用です。だってクールで有能なクリーグ波奈さんが一緒ですもの。

そして会は始まり，おおっといきなり Takahashi vs. Matsushima の討論開始だ！「日本の宗教心理学，全然なってないじゃん」「いやいやいやいや，欧米は何でもユダヤ＆キリスト・コンテクストだから異界が見えないんだよ」「だって松島くんAKBマニアでしょ？」「いやいやいやいやSKEだし」と，がぜん盛り上がるなか，執筆者の紹介コーナーに。私もほろ酔い加減で一言ごあいさつ。そこへ「神道って，宗教なの？文化なの？」というお声。思わず「私の定義では宗教です」とお答えしたが，いま冷静に考えれば，明治政府の政策上「神道は宗教にあらず」とされたとき，出雲大社は「いやいや，うちは宗教としての神道ですから」と言って，教派神道連合を結成したことを話せればカッコよかったと思う。私もまだまだである。

その後，ある出席者からは，「いま，神道界は日本会議とかで暴走しそうに見えるけれど，大丈夫？」とのご質問。この問題には私も頭を悩ませていた。そうなのだ。多くの人が集う宗教という世界には，政治的要素が必ず存在するのだ。ここも宗教を研究するうえでの「障害物」となり得る。私自身，宗教実践においてそうした臭気に毒される局面もあるので，研究ではやはり「心理学する」ことで，バランスを維持したいのである。だから私は，宗教が「物語」を供給し，広め，権威づけ，保

証するシステムの重要性を，「ナラティヴ」という要素を通して論じたいのだ。これはある意味闘いだ。論じることで「宗教」を変容させ，結果として世界を（ステキな形に）変容させるのだ！それが私の使命なのだ！いくつもの刺激的な質問を投げかけられたことで，私は気づいたのであった。神・降臨。

私は思わず再びマイクをとり，「この，水と自然と食料に恵まれた列島で生まれたナラティヴは，荒野で生まれたそれとは違います！「国家神道」とか「右翼」という名の物語は，神道ではありません。本来の神道は，必ずや平和に貢献します。世界の平和は，私が守ります！」と宣言してしまった。勝算はある。だって宗教心理学研究会に所属しているんですから。皆さま，世界を平和にするためにこそ，宗教を心理学しましょう！

2016 年 7 月 28 日（木）『宗教を心理学する』出版記念イベントに参加して

橋本広信（群馬医療福祉大学）

その日は夏に相応しくとても蒸し暑い日でした。沈みゆく夕陽はまぶしく，目を細めながら駅から会場に向かって歩いていましたが，正直，少し不安な気持ちもありました。

「寺カフェ代官山」は意外にすぐに見つかりました。恐る恐る会場に入っていくと，すでに松島さんをはじめ中心スタッフの方々が忙しく準備をされていました。邪魔にならないように隅に居場所を見つけた私は，徐々にその場の雰囲気に慣れると，冷静に観察をする外部の参加者のような気分で開会を待ちました。

当日は国際心理学会に参加をしてからこのイベントに参加された方も多くいたようで，カフェのあちこちで挨拶が交わされていました。宗教心理学研究会のワーキンググループにお邪魔させていただくくらいの私は知り合いも少ないため，どのような方がこちらの会場に集われていたのかを正確に知ることはできませんでしたが，35 名もの参加者があり，カフェが手狭に感じるほどの盛況ぶりでした。

時間となり，会場の代表として浄土真宗本願寺派信行寺の方から「寺カフェ」の紹介があり，やがてプログラムの「出版記念スペシャル対談」が始まりました。松島さん，Takahashi さんの軽妙な掛け合いにより進行した対談は，宗教性や宗教心理学研究に関する日本と海外の現状や差異について，西洋と東洋という分け方が正確かどうかわかりませんが，二人がそれぞれの現状を熟知する者として，それらの見方をぶつけ合うような形で進んでいきました。やがて，「神」をめぐる概念や言葉についての解釈など，（正確には覚えていませんが）宗教を取り巻く文化的背景の差異や研究者の意識の違いに話が及び，二人の語りが熱を帯びると同時に，私が飲むビールの量も増え続け，気分がよくなるのと反比例して頭が動かなくなっていきました。

しかし，夏の夕暮れ時から，ここにこれだけの人が集まって，日本の実証的宗教心理学研究はいよいよこれからだ。そして，世界にはなかなかない独自の見方や価値を発信する使命があるのだという，松島さんの強い意志表明は，一つのイメージを思い浮かばせてくれました。ブッダの死後，文字に残されていなかったブッダの教えを正しく伝える必要を感じた信徒たちが，伝えられた説法を整理して統一を図るために行った仏典の編集作業，すなわち仏典結集です。

この会には，多様な背景をもった方々が集っていたとのことです。信じる対象も違うでしょうし，宗教への関わり方も多様であると思います。しかし，この時この場に，立場を越えてこれだけの人が，一つの方向性をもって集うということに，小さな奇跡を感じたのは私だけでしょうか。かつて，ブッダの断片的な教えの数々に触れて再生をしたり，生きる目的を見いだしたり，教団に所属したりと，それぞれの立場でその言葉や教えを大事にしていた人がそれぞれの経験や力を集め，

後世に思想的財産を残そうとしたという歴史は，もしかして，こんな集まりから始まったのかなと感じました。

『宗教を心理学する』では「「特定の宗教教団における信仰の有無」を基準にして考えることから一旦離れてみてはどうか」という提案もされています。宗教と心理学という二つに関心をもつという条件で集まった人々から，今後宗教心理学の可能性が広がって行き，宗教性や人間性に関する価値ある研究や視点が生み出される日が近づいてくる足音が聞こえてくるような一夜でした。最後に一言。松島さんから，「坂本龍馬のような存在になりたい」というような趣旨の発言がありました。それはいいのですが，早死にしては困ります。と酔った頭で考えたのも覚えています。

出版記念イベント体験記
ー参加者からの感想ー

濱野佐代子（帝京科学大学：非会員）

まず初めに，「宗教を心理学する：データから見えてくる日本人の宗教性」の御出版を心よりお慶び申し上げます。さる，2016 年 7 月 28 日，出版記念イベントが寺カフェ代官山で開催されました。趣向を凝らした内容と開催場所に興味を魅かれ，また，これまで「宗教性/スピリチュアリティの多次元分析プロジェクト：J-MARS 」の研究に興味を持っていたこともあり，友人に誘われて参加させて頂きました。寺カフェという厳かでありつつも日常的な雰囲気に包まれた会場は，出版本への期待とお祝いのムードにあふれていました。

私が，J-MARS の研究チームと出会ったのは，2013 年の日本心理学会第 77 回大会における「宗教性/スピリチュアリティと精神的健康の関連」のシンポジウムでした。私事ですが，家族が闘病していたこともあり，「重篤な病気の人は人生が限られた中でどのように生きる意味を見出すのだろうか。その時に救いとなるものは何であるのか。」ということを自問自答していた時でした。その答えを探す機会になるのではないかと思い，研究分野としては門外漢の私ですが，そのシンポジウムに参加しました。シンポジウムの企画司会者の松島公望先生の当該研究に対する情熱と高い志に感銘を受けました。しかし，このときの私はまだ J-MARS の方向性は理解出来ていなかったのでした。

一方，そのシンポジウムの発表の中で特に心に響いたのは，この本の著者でもある質的研究班の浦田悠先生のご発表でした。スピリチュアルケアのトピックの中の白い蝶のエピソードです。『「亡くなった家族が白い蝶になって帰ってきた。」と語る人がいた場合に，「そう思うのですね。」と単に傾聴するよりも，現実にはありえないけれども「亡くなった家族が蝶になって戻ってきましたね。」と寄り添うことがその救いになることもある。』というお話でした。次の年に私の闘病していた家族は亡くなりましたが，白い蝶が傍に飛んでくるとその話を思い出してなぐさめられることがあります。特定の宗教に傾倒していなくても，人生の中で人はどうしようもできない事態（死など）に直面すると，人智を超えたものを信じることが救いになる場合もあるのだと実感しました。

「そのような日本人の宗教性/スピリチュアリティとは何であるのか。」それ以降，私は，J-MARS の一連の研究に興味を持ち，各心理学会で開催されたシンポジウムに参加するようになりました。偏りがないように様々な宗教の立場を意識し異なる心理学研究法を用いるメンバーで構成されたバランスや研究自体の面白さはもちろん，全体でどのような方向性に向かっているのかに興味が湧いてきたのです。

さて，出版記念イベントに話を戻します。タカハシマサミ先生と松島先生が，『世界の宗教心理学と日本の宗教心理学の新潮流を語る』についての講演をされました。出版本の内容に関わる議論について講演者や著者を交えた場で行うこと

は画期的で，イベントの参加者にとっては，本ができるまでの最初の段階を追体験でき，完成への軌跡を一緒に歩むような僥倖を得ることが出来たのではないかと思います。さらに，その先の船出にも立ち会うことができたのではないでしょうか。

具体的には，松島先生は，宗教を心理学する上で細心の注意を払われた研究対象と方法論について概観されました。どのような研究でもそうですが，デザインが要となってきます。「アメリカからのスピリチュアリティの定義づけがユダヤ-キリスト教の文脈からなっている」という松島先生の問題提起のように，宗教性に焦点を当てる場合は研究対象者の設定が特に重要であると感じました。さらに，この本の編著者でもある川島大輔先生からの「極楽浄土」などの専門用語を英訳して意図を伝えるときの難しさなどの議論も加えられて，ことばからイメージする言外の含みの難しさと文化の影響を改めて感じました。また，タカハシ先生がお話されたアメリカでのデータの開示の義務と重要性のお話は，今後日本における研究者の倫理的な問題として重要な課題となってくるのではないでしょうか。これらの活発な議論を拝見して，この本では，宗教性やスピリチュアリティだけではなく，人間の様々な精神活動や人生に影響を与える根源の部分を探ろうとしているのではないかとさえ思えてきました。

私は，常々，心理学の研究は客観的でなければならないが，一方で，その研究者が紡ぎ出すからこそ導き出される研究の形や方向性があるのではないかと考えています。いいかえれば，心理学の研究者は様々な経験を武器として研究に深みを与えていくのだと考えています。その観点からいうと，「宗教を心理学する」の著者の先生方の歩んできた人生がこれらの研究や本にさらに一層の深みを与え魅力的にしているのではないのでしょうか。ここには書ききれない出版記念イベントでの熱い議論の軌跡は，「宗教を心理学する：データから見えてくる日本人の宗教性」に息づいて読者を待っているのかもしれません。

特集 2 :『宗教を心理学する』を書評する

今回のニューズレターでは，3 名の方に『宗教を心理学する』の書評をお願いしました。それぞれの研究分野，領域から『宗教を心理学する』をどのように考えることができるのか，どのように捉えることができるのかをじっくりまとめていただきました。今回の書評を通して，『宗教を心理学する』の意義，可能性，そして課題を考える機会となれば幸いです。

宗教社会学の立場から

小池　靖（立教大学：非会員）

1．構成と内容

本書は「宗教心理学」ならびに隣接諸分野の研究者たちによる，数年に及ぶ研究プロジェクト「宗教性／スピリチュアリティの多次元分析プロジェクト」（Japan Multidimensional Assessment of Religion and Spirituality Project=J-MARS ）の産物であるという。出版社ホームページには「『日本人は無宗教である』と巷に流布されている思い込みを長年にわたる心理学の視点にたった膨大な調査から検証してゆく。『宗教性とは何か』という視点からみると意外な日本人の宗教性が浮かび上がってくる」との短い解説文がある。日本人の宗教についての量的調査は，アメリカなどに比べると驚くほどおこなわれてきていないが，この研究プロジェクトは，大規模な質問紙（アンケート）調査も用いて，「実証的宗教心理学」の長年の停滞を打破しようという意欲的なもののようだ。

しかしながら，この書の各章は，それだけにとどまらないバラエティをもっていると言えよう。具体的に見てゆこう。

序章「日本人の宗教性を測る—宗教を心理学するためのガイドライン」（松島公望：東京大学）では，このプロジェクト全体の見取り図，世界観が示されているとも言える。従来のキリスト教的な，入信する組織といった宗教イメージでは日本人の宗教性はとらえきれないという。「『宗教性』を人間の誰もが有する『個人の特性』として捉えることにより，『個人による高低＝個人差』が浮き彫りとなり，『宗教性』は人間の特徴を測る概念として機能するのである」（ 13 頁）。そうだとすると，この書は，人類は皆，宗教的であるという前提に立っているとも言えそうだ。

第１章「東日本大震災の被災地から見る日本人の宗教性—非業の死を遂げた子どもへの慰霊をめぐって 」（大村哲夫：東北大学）では，震災の被災地において，死んだ子どもに対して，主に公立小中学校が卒業証書を広く発行している現象から分析している（学校への郵送調査に基づいたもの）。「日本人の自然観と死生観が一体となったゆるやかであいまいな宗教的心性」を捉えることに成功しており，さらに，殉難者が守護神になるといった，ある程度人類に普遍的な習俗とも通底していると示唆している。学校という場がもし宗教的になるとすれば，それは慰霊のモーメントであるということなのだろう。

第２章「それからを生きるための宗教—阪神淡路大震災からのメッセージ」（川島大輔：中京大学・浦田　悠：大阪大学）では，阪神淡路大震災を受けて，地元の公園で自然発生的に始まった「ろうそく法要」の事例を通じて，やはり慰霊における日本人の宗教性の発露を論じている。

第３章「日本の中で『信仰』に生きる人々—あなたの知らない世界？」（相澤秀生：跡見学園女子大学）では，J-MARS の大規模質問紙調査のデータを用いて，信仰をもつと答えた回答者（キリスト教，仏教，神道，その他）の「宗教性」の内実について精査している。具体的には，主体的信仰の大切さ（向宗教性）についてはキリスト教の信者がリードし，観音，お不動さまなどへの親しみといった信念（加護観念）については神道がリード

し，死後の世界などへの信念（霊魂観念）についてはキリスト者がやや劣る，といった発見を提示している。末尾では，宗教的なるものへのイメージとして「教義」対「民俗」といった対比があること，それは大まかに言って「キリスト教」対「仏教，神道」の対比でもあることを示唆している。

第４章「『こころの健やかさ』から見えてくる日本人の宗教性—より良く生きるために宗教は必要か？」（中尾将大：大阪大谷大学）では，J-MARS の調査における，自由回答欄のキーワードを分析することを通じて，「こころの健やかな人」像を浮き彫りにしようと試みている。しかし教団関係者と一般人とを並べて「＜こころの健やかな人＞とはどのような人だと思いますか？」（ 86 頁）と問えば，前者の属性をもつ人がより「宗教的に」回答することは自明のことのようにも思われる。

第５章「自然体験の中での宗教心—宗教性の一指標として」（西脇良：南山大学）では，自然体験の中で生命力や，自分の小ささを自覚するといったような「宗教的自然観」を現代日本の中高生がもっているかどうかを探っている。「宗教的自然観」については「我々の祖先の精神生活の内に自然が，殆ど宗教に於けるそれにも等しい一種の救済者としてのはたらきをなして来た」とも先行研究で分析されてきており（家永三郎，本書 112 頁より再引用），J-MARS 該当項目の自由回答欄における調査結果について計量テキスト分析をおこなうと，およそ３割の中高生がこうした「宗教的自然観」をもっているのだという。ところで評者小池は，大学生から「自然に対する畏敬の念までを宗教だとするのは違和感がある」旨のコメントをかつてもらったことがあるが，こうした意識は完全に無視しても良いのだろうか。

第６章「日本文化の中に生きている『神道ナラティヴ』—身近すぎて気づけない存在」（酒井克也：出雲大社和貴講社）では，日本人の生活語彙の中に今も残る神道的な言葉遣いの例（水に流す，ミソギ，言挙（ことあ）げをする等）を挙げた上で，J-MARS 調査から，出雲大社教宗教指導者は特に神の「ご神徳」を感じたことがあると答えたということ，また自身のインタビュー調査から，出雲講参加者には，出雲大社に関して，結婚運をはじめとする「ご縁」があったと述べている回答が見られることなどを論じている。

第７章「日本人は宗教，スピリチュアリティをどのように見ているのか—イメージから読み解く日本人の宗教性」（小林正樹：中央学術研究所）では，J-MARS 調査において，宗教，スピリチュアリティのイメージをたずね，宗教は重厚で組織的なイメージがあるいっぽう，スピリチュアリティは個人的でやや軽薄なイメージがあるということ，また年代によるそうしたイメージの差異などを提示している。

第８章「『信仰をもっていない』と答える人の信仰の世界」（荒川　歩：武蔵野美術大学）では，日本人が各種調査において信仰心が低いこと，宗教に対しても大きな期待をしていないことなどが示したうえで，それでもなおかつ，「宗教的意味づけシステム」に影響され，そのシステムを必要に応じて利用しているという意味で日本人は「信仰をもっているとも言える」（ 177 頁）と結論づけている。

終章「スピリチュアリティを心理学する—spirituality に混在する『厄介さ』と『可能性』の探究」（タカハシマサミ：ノースイースタン大学）では，ことばとしての英語の Spirituality と日本語のスピリチュアリティとの差異を分析している。日本のスピリチュアリティ研究においては「キリスト教系の終末期医療における研究が最も多い」こと（ 184 頁），アメリカでは Spirituality は宗教的かつ絶対的な「善」と意識されることが多いいっぽう，日本でスピリチュアリティは必ずしも良い意味だけではイメージされていないということ等を指摘している。

2. 評価

以上のようにこの書はバラエティに富んだ論点を含んでいる。巻末の「付録」には「J-MARSにおける質問紙調査の概要」（松島公望：東京大学）も掲載されているが，現在の日本において，配布形式の質問紙調査で，有効回答数 6620 票を集めて，宗教についての計量分析のプロジェクトを成功させたことは特に，大いに評価されて良いと思われる。もちろん，データ面で言えば，研

究会の人脈で質問紙の配布が容易なコンテキストを選んだということなのか，全回答（者）の分布は，必ずしも日本人全体の予測される平均と相似形というわけではない。たとえば，回答者の20%以上（ 64 頁の数値から計算）がクリスチャンとなっている等の偏りは，一定程度存在している。また，通常このような報告書では，質問紙の全ページが転載されていることが普通であり，たとえ一般書というフォーマットであっても，その情報は有益であっただろうと思われる（が，掲載されていない）。

この研究プロジェクトは「宗教」一般ではなく，日本人の「宗教性」にこだわって，独自の尺度も用意しながら心理学的調査研究をおこなったということにプロジェクトのオリジナリティがあり，そのねらいはある程度達成されていると言って良いであろう。ともすればとらえどころがない，それゆえに，調査しづらい日本人の宗教性を，心理学的調査の俎上に載せようとした，言わば格闘の記録がこの書なのであろう。

3. 疑問点

次に，この書に対する疑問点，違和感を述べてゆきたい。

まず第一点は，最終的なこの研究成果において，日本のものも含めた，宗教研究での先行研究，それも特に量的調査をおこなった先行研究とのつながり，異同が見えにくいということである。たとえば，「宗教ではなくスピリチュアル」な人々についての特徴として，比較的高学歴だが年収は低く，友人などの社会的ネットワークが少ない人，そして中年以上の女性が多い，といったアメリカの調査結果がかつてあったが[Roof et al 1994]，そうした研究と似たような結果が出たのか，違ってきているのか，といったことも当然検証すべきではなかったか。(1) 過去の先行研究を強くは意識していないということが，独創的な「宗教性」概念構築を可能にした，と言えるのかもしれないが…。

次なる点は，むしろ違和感であるが，日本人の宗教があいまいでとらえにくいことの反映であろうが，対象としたい「宗教性」について，ある種の「言い訳」「申し訳なさ」のようなものが行間ににじみ出ているということである。たとえば1章における「厳密な意味では『宗教』とは言えないものの，慰霊の意味を込めた『宗教性』を帯びた儀礼」といった表現にそれが現れている（ 38 頁）。つまり，＜このように見方を変えれば，これも宗教ですよね？＞といった姿勢を，研究者は取り続けなければならないのだろうか。

この点について，もう少し発展させて深く考えてみたい。

研究者が，＜これも宗教ですよね？＞と言い続けなければならないということは，日本の多くの人々は「これ」を，取り立てて宗教とは考えていないということでもある。2章の「ろうそく法要」現象について，インフォーマントの僧侶自身が，その実践について図らずも「宗教的な概念というのは全部，後です」（ 54 頁）と語っているのは非常に印象的でもある。つまり，当事者が宗教ではないと思っているものを，あえて宗教性の発露だとして扱うということの是非は，簡単に済ませてしまって良い問題ではないだろう。

9章のタカハシ論文は，データから新しい発見を明示していて，論証は見事であるものの，日本人のスピリチュアリティ概念をめぐって「宗教や哲学の考えをもとに精神的な支えを提供するスピリチュアル・ケアの専門家のところに自分の先祖の降霊を頼みに来るなど，的外れな例が多々ある」とも解釈している（ 198 頁）。しかし「多々ある」のならばこそ，＜それもまた日本人のスピリチュアリティの一端である＞という解釈も可能なのではないか。先祖の降霊を望む意識が＜スピリチュアルでない＞などと，研究者が一方的に判断してしまって良いのだろうか。つまりこれは，ろうそく法要の例とは反対に，当事者が霊的であると思っているものを，研究者がそうではないものとして扱う，という図式である。

もちろん，これこれを今回は宗教性として扱う，と事前に定義して研究をおこなったこと自体は公正な手続きであり，学問的な意味での瑕疵は存在していない。しかしながら，言い方を変えればこの書は，タイトルを見て期待されうる内容，すなわち，大多数の日本人は宗教についてどのようなイメージをまずもっているのか，データを虚心

坦懐に受け取って浮き上がってくる日本人の宗教とは何なのか，その結果日本人は他文化と比べてどの程度宗教的であるのか／ないのか，といったことは脇に置き，むしろ，「普遍的で，人間の実存に必要な宗教性」という宗教イメージがまず先にあり，それをふくらませるかたちで研究を進めてきた感は（いち読者としては）否めない。

たとえば4章で「より良く生きるために宗教は必要か」という問いを立てているのに，「人間の悩みは大きく2種類に分けられる……ひとつは日常生活を送る上で障りとなる悩みである……もう一方の悩みは，『宗教的な悩み』とも言えるもので，宗教によらなければ解決が難しい問題といえるだろう」（ 90 頁）などと断言してしまっているのは，研究の結果明らかにすべきことを，先取りしてしまっている印象も受けるのである。

これから先，「宗教現象の計量調査」のあるべき姿とは，どのようなものになるのだろうか。当事者が気づけないような意識・行動，さらに言えば，見えない宗教論　ー制度宗教が衰退しても，個人のアイデンティティやら実存やらを支える宗教的次元は普遍的に残る，といった論ー　などは，そもそも計量調査にはそぐわないだろう。

また，宗教的な「自意識」を独立変数にした場合，日本だとそもそも当該集合が少数になってしまうというのならば，むしろ，墓参りに行く頻度，スピリチュアルな情報に触れる頻度など，宗教関連「行動」を独立変数にして，それが個人のその他の（世俗的な）行動・意識にどの程度影響を与えているのか，といった調査計画を立案することも可能だろう。つまり，どの程度自分を宗教的だと思っているかというのは最初から問わない，というかたちでの分析である。その際，先入観を与えないように，質問紙のタイトルも「日本人の生活や意識に対する調査」といったものにするなどの工夫もありうるかもしれない。

4. 日本人と宗教

「日本人＝無宗教か」論は，日本宗教論の核心であるが，もちろん，ほとんどの宗教研究者は日本人は無宗教ではないと考えている。阿満利麿『日本人はなぜ無宗教なのか』（阿満　1996 ）は，外国語にも翻訳された優れた論考だが，評者小池は，大学生とこうした問題について対話を重ねてゆくうちに，阿満の言うような「日本人は無宗教ではない，それを理解できない日本人はおかしい」といった「啓蒙的説教節」に対して，次第に違和感を覚えるようにもなった。おそらく，外国人にとっては，日本の伝統的な神社仏閣が Japanese　Religion/Spirituality であることは，かなり明白であろう。つまり，国際的な比較の視点があってはじめて「日本人も"有宗教"である」という理解に到達できる。したがって，幼少期からずっと日本に住んで，日本人とだけ話して生きているのであれば「俺たち無宗教だよね」という認識でも，おそらく実害はほぼなく，生活実感にもむしろ近いかもしれない。これだけ当事者のナラティブが重視される時代に，日本人の「私は無宗教です」という「語り」まで軽視するのはゆき過ぎなのではないか，とも今は考えている。

社会学的に言えば，宗教を論じる際の視点は大きく分けて3つあり，①ウェーバー的な，行為者の意味付けに注目し，セクト的な集団の，歴史における影響力を考える立場，②デュルケーム的な，社会を構成する行為そのものが宗教的であるとする立場，③マルクス的な，宗教を階級の利害対立の産物とみる立場である。②をさらに，社会と調和的なものとしての宗教，というふうに読み替えれば，日本宗教を研究する日本人の学者のほとんどは，暗黙のうちにデュルケーム的な宗教概念を用いて研究をおこなっている（この書も，大筋ではそうである）。それは，日本人にとっての宗教が，かまどにも神様が居る，トイレにも神様が居るといった，いわゆる「八百万の神々」であることと無関係ではないだろう。村田充八は，何でもありの汎神論的世界観は，容易に「疑似宗教としての無神論」に転じてしまいがちだ，と述べているほどである[村田　2007]。

そもそも西洋起源の概念である宗教を日本にあてはめた場合，そこにズレが生じるのは不可避である。しかし宗教研究以外で，宗教の概念にそれほど大きな混乱が生じているとも思えない。その意味で，宗教・宗教性をめぐる概念の問題は，むしろ調査者の利害と大きく関わっている。宗教研究者が宗教を論じ始めると，まずもってそ

の宗教概念が社会の大多数のそれと異なっており，宗教概念をめぐる終わらない「神学」論争が始まってしまう感がある。その論争に決着はつけられるのだろうか。

いま，宗教はどうなっているのか。現代社会において，宗教は果たして拡大しているのか，衰退しているのか。宗教についての学問的「エキスパート」ならば，そうした問いに真っ先に答えられるべき存在のはずである。概念論争のせいで，宗教研究者が，宗教についてはっきりした態度を取れないというのは，社会からの期待にも応えていないということなのではないか。

この書は，心理学の立場から，宗教研究に投げかけられた大きな問いかけであり，宗教研究における新たな挑戦の第一歩である。この書が，上記のような様々な論争の起爆剤になるとしたら（いや，既にそうなっているであろう），それだけでも学問の世界に対する貢献は非常に大きなものとなるであろう。願わくば次なる研究が，この実りある研究成果を継承しながら，大胆に異なった視座でおこなわれることも期待している。その時，宗教心理学研究は，社会からの学問への期待にもさらに応えられるものとなるであろう。

註

(1) 渡辺・黒崎・弓山[2011]も，計量分析を用いて，日米における宗教観と幸福度との相関を調査している。

参考文献

阿満利麿　1996『日本人はなぜ無宗教なのか』ちくま新書。

村田充八　2007「日本社会における宗教動向とキリスト教伝道の可能性：宗教忌避傾向と『思考の枠組み』から」宗教社会学の会編『宗教を理解すること』創元社。

Roof, W. C. et al. 1994 A Generation of Seekers: The Spiritual Journeys of the Baby Boom Generation. Harper Collins.

渡辺光一・黒崎浩行・弓山達也　2011「日米の宗教概念の構造とその幸福度への効果 ： 両国の共通性が示唆する普遍宗教性」『宗教と社会』17: 47-66.

宗教心理学の新たな可能性

小泉晋一（共栄大学）

2016 年 7 月に誠信書房から『宗教を心理学する　ーデータから見えてくる日本人の宗教性ー』（松島公望・川島大輔・西脇　良編著）が刊行された。「まえがき」に書かれているように，本書は「根拠となるデータをもとに，宗教という事柄について研究する」ことを目的にした実証的宗教心理学の本である。本書を読むと，実証的宗教心理学の研究は，日本では「永く沈滞して」いたという。その一例として，1946 年に今田恵が『宗教心理学』を刊行してから 2011 年に『宗教心理学概論』が刊行されるまでの約 60 年間で，宗教心理学の本は 2 冊しか刊行されていないことがあげられている。なぜ，このような停滞が起きたのか？主要な原因として，日本特有の宗教的風土の複雑さを指摘している。日本人の宗教性をとらえるのは難しいがために，日本では宗教に関する心理学的研究がほとんど行われず，研究者間の議論も交流もなされず，研究知見の継承もされなくなるという悪循環が繰り返された。こういった悪循環を打破するためには，まずは研究対象を明確にしたうえで，その対象に特徴的な宗教性を探り，対象間に共通する宗教性を浮上させることが有効なのではないかと本書は説く。そうすることによって，帰納的に日本人の宗教性を明らかにするのである。

本書はその試みの第一歩を踏み出したものである。日本で初めての実証的宗教心理学の研究実例集といってもよいだろう。序章と付録を除けば，全部で 9 章から成っており，いずれの章も実証データに基づいて日本人の宗教性が論じられ

ている。宗教系の私立学校の生徒，公立中高生，一般成人，大学生，宗教教団の信者，宗教教団の指導者など多数の集団から幅広くデータが集められている。研究方法も多種多彩で，質問紙法による量的データの統計解析も行われているが，それだけではなくフィールドワークによるインタビューの分析や自由記述から得られた言語データの解析など質的研究も多く，最先端の研究法が駆使されている。宗教心理学には宗教学的宗教心理学と心理学的宗教心理学との二つがあると言われているが，本書は明らかに心理学的宗教心理学の書であり，これから宗教心理学を志して学術研究を行おうとする学部学生や大学院生にも有用な手引きとなるであろう。

ここで，日本の宗教心理学が停滞していたことに話を戻すと，日本人の宗教的風土の複雑さも大きな原因ではあろうが，歴史的にみるとその原因は明治・大正期の心理学界に行きつくような気がする。日本の実証的宗教心理学の研究は，1900 年に元良勇次郎が『哲学雑誌』に掲載した「現代学生の宗教心に関する調査」が最初であるとされている。元良は心理学者ではあるのだが学問の関心の幅が非常に広く，著作の範囲は哲学，教育学，倫理学，論理学，社会学，経済学にまで及んでいる。宗教についても多大な興味をもっていた。著書では『現今将来倫理及宗教』(1900)があり，論文では「禅と心理学との関係」(1897)，「東洋に於ける自我の観念」(1905)，「宗教と理性」(1906)，「精神修養上宗教と科学の関係」(1906)，「禅と精神修養」(1910)などがある。

元良が 1912 年に 54 歳で逝去した後に，松本亦太郎が東京帝国大学心理学教室の主任教授となる。心理学教室には松本の他に，助教授として福来友吉がいた。福来は催眠の心理学的研究で文学博士の学位を得た後に，大学で変態心理学を講じた。James の心理学に傾倒して，『心理学精義』(1902)，『教育心理学講義』(1908)など James の翻訳書を刊行した。James の『宗教的経験の諸相』を初めて翻訳したのも福来である。1904 年 8 月から 1908 年 1 月までの約 3 年半の間，『宗教的経験の諸相』の翻訳を仏教雑誌である『無盡燈』に連載した（この翻訳は途中で終わっているので，完全に翻訳したわけではない）。周知のように，福来は透視と念写の研究によって 1913 年に東京帝国大学を追放された。それから間もなくして心理学界とも決別して，四国巡礼や高野山での修業を行った。やがて密教思想に傾倒して，心霊研究に専念するようになる。心理学界から離れた後に『心霊と神秘世界』(1932)，『生命主義の信仰』(1934)，『日本精神の核心』(1938)などの宗教色の強い書物を著した。

ここで注意すべきことは，福来は透視と念写の研究に着手する以前から，すでに宗教に対する強い関心をもっていたということである。福来が透視の研究に着手した年を 1910 年とすれば，この年までに福来が宗教雑誌に掲載した論文数（講演記録なども含む）は，おそらく元良勇次郎を上回る。具体的な雑誌名としては『新仏教』『東亜の光』『布教』『和融誌』『心の友』『無我の愛』などがあげられる。宗教雑誌に積極的に執筆して関与していた様子がわかる。また福来が著した『心理学講義』(1907)は 15 章と「附録」から成るが，「附録」には「苦悶と救済と無我」「聖者を論ず」「幻覚的神」「聖者の見魔」の 4 つの節が収められている。福来は，これらの宗教体験を変態心理学の文脈の中で論じた。

福来の専門は変態心理学ではあったが，当時の心理学者の中では宗教心理学に関する業績が最も多く，宗教系雑誌にも最も多くの論文を掲載していた。日本では最も宗教心理学に対する親和性の高かった心理学者であったといえる。福来が大学を追放されたことにより，東京帝国大学では変態心理学の講座が消え，日本の臨床心理学が低迷したと言われている。小熊虎之助は，「臨床心理学者が，一般心理学界から外道として白眼視される傾向」が非常に強かったと証言しているので，福来の事件の影響で臨床心理学が主流ではなくなり，低迷したことは間違いないことであろう。しかし推測が許されるのであれば，実際には，宗教心理学も少なからず影響を受けたのではないだろうか。松本は変態心理学を好まず，「事件によって失墜しかけた心理学教室の信頼回復をはかるべく，正常の方法による正常の現象の研究を奨励した」と述べた。一般人の知覚や行動を対象にした実験心理学研究が重視され，

それが心理学界の趨勢となるのである。

福来が失脚した後も，確かに日本では宗教心理学の研究が行われた。例えば石神徳門，飯沼龍遠，西澤（澤田）頼應，入谷智定(ちてい)は，松本の指導の下で宗教心理学の研究を行ったのだが，彼らはいずれも寺院の子弟である。当時の東京帝国大学心理学教室には寺院の子弟が多く在籍していたのであるが，宗教心理学研究の多くは主に寺院の子弟などの宗教関係者が担っていたのではないだろうか。したがって，宗教心理学は必ずしも心理学のメインとはならなかった。松本は Wundt の民族心理学の枠組みの中で宗教心理学を理解して許容していたようであるが，松本自身がどこまで宗教心理学に関心をもっていて，どれだけ積極的に関与していたのかはわからない。松本には宗教心理学に関する研究実績は恐らくない。むしろ宗教心理学に関心をもっていたのは元良と福来であり，桑田芳蔵である。

桑田は元良から心理学の指導を受け，その後ライプチヒ大学に留学して Wundt の下で民族心理学を学ぶ。1917 年に東京帝国大学助教授になる。心理学教室は松本の実験心理学と桑田の民族心理学の二本立てとなり，桑田が民族心理学の一環として宗教心理学を推進するのである。桑田の宗教心理学は変態心理学の視点を外しており，また James のアプローチを重視せず，まったく推奨しなかった。したがって，必ずしも幅広い視点に立った宗教心理学ではなく，一般の興味を惹くような内容でもなかったと思われる。ほとんどの学生は，つまり寺院の子弟などの宗教関係者以外の学生は，宗教心理学ではなく実験心理学の方を選んだのではないだろうか。日本での宗教心理学の停滞の一因として，歴史的には福来の失脚が浅からず関連しており，それが宗教心理学に対する関心と研究の範囲とを狭め，限定してしまったのではないかと思われる。本書の内容とはあまり関係のないことなのだが，歴史的な事柄としてここに書かせていただいた。

さて本書の内容であるが，序章は「日本人の宗教性を測る ー宗教を心理学するためのガイドライン」と題されている。この章では宗教心理学の研究を行ううえでの重要なことが書かれている。それは日本人の宗教性を考える場合に，まずは「特定の宗教教団における信仰の有無」を基準とするのではなくて，信仰以外の他の要素についても着目する必要があるという指摘である。つまり個人がどれだけ宗教に関与しているのかを知るためには，個人の信仰の有無だけを指標とするのではなく，「知識」「信念」「体験」「行動」「効果」の 5 つの指標から広く捉える必要がある。特に日本人は信仰をもっていないと回答する人が多いが，それは特定の宗教教団に所属していないというだけの場合が多い。信仰がなくても，いろいろな宗教体験をもち宗教行動をとっている人がいる。日本人の複雑な宗教性を研究するためには，これら 5 つの指標が重要であり不可欠である。そして，これらの指標に基づいて測定される宗教性は，誰もがもっている「特性」として捉えることが可能とされている。宗教性もパーソナリティと同様に構成概念であり，心理尺度を作成すれば測定可能で，心理尺度の値の高低によって個人差を検討できるのである。このように，序章では宗教心理学の研究を行ううえで欠かすことのできない枠組みが定められている。この厳密な枠組みを定めたうえで宗教心理学を研究する必要があり，その実例が第 1 章から第 9 章に示されている。

第 1 章は「東日本大震災の被災地から見る日本人の宗教性　ー非業の死を遂げた子どもへの慰霊をめぐって」と題されている。東日本大震災で死亡した子どもに卒業証書を授与することが報道されたが，それは東日本大震災に限らず日本全国で行われていることらしい。第 1 章では，卒業証書の授与という死児の慰霊のあり方の調査をとおして，日本人の宗教性に対するアプローチを試みている。その方法は，まずは被災地域の公立学校にアンケートを配布して，回答の分析をとおして実態調査を行った。そして自由記述による回答から，授与という行為には私的な慰霊の意味が強いことを明らかにした。民俗学的な視点から考察すると，そこには民間信仰として知られている青森県の川倉地蔵との間に共通点が見いだされる。川倉地蔵では今でも死児供養の風習が残っている。両者とも，死者も生者と同じように

年を重ねて成長していくという素朴な心情が根底にある。そして，卒業証書の授与などの儀礼的行為をとおして生者は死者を慰霊し，それが遺された者にとっての癒しにつながることをこの章は指摘している。本章の特徴は，単なるアンケートの分析にとどまらず，民俗学的な巨視的な視点をいれて考察されているところにある。

さらに，慰霊行為の根底には遺された者の罪悪感（サバイバーズ・ギルト）があることを指摘し，非業な死を遂げた人を祭神として祀り上げるのはその表れであると述べている。祀り上げの風習は日本独自のものではない。本章は西洋の聖人画を提示しながら，キリスト教では殉教した聖人を祀り崇める事例が多いことを丁寧に説明している。慰霊することによって荒ぶる魂を鎮め，崇め祀ることで守護を得るという発想は人類に普遍的であるようだ。ここで興味深く，たいへん重要な指摘がなされている。それは従来，死者の慰霊は死者の記憶を留めるために行われると考えられているが，実際には慰霊の儀式は死者を忘れるために行われるのではないかということである。現実世界を生きていくためには死者の束縛を離れる必要がある。死児に卒業証書を授与するなどの非合理的な行為の背景には，実は極めて合理的な深い意味があることが考察され，示唆に富んだ内容となっている。

第 2 章は「それからを生きるための宗教　－阪神淡路大震災からのメッセージ」と題されている。この章では，阪神淡路大震災から 20 年以上も続けられている「ろうそく法要」のフィールドワークをとおして，宗教が震災による喪失体験に果たす機能と役割とが検証された。ろうそく法要に参加し続けている 6 人を対象にインタビューを行い，法要に対するそれぞれの思いを尋ねている。インタビュー内容の分析をとおしてわかることは，ろうそく法要が人々の中で重要な位置づけをもっているのだが，各人の意味づけは一人ひとり異なるということである。死んだ家族に祈りを捧げるために参加する人もいれば，人との繋がりを感じるために参加する人もいる。参加の意味づけは多様だが，この法要の役割は死者の記憶，あるいは震災の記憶を忘却することがないように，人々の中にずっと留めておくことにあるという可能性を示唆している。語り手の話を丹念に分析することによって，何らかの仮説が生成される。インタビューによって得た言語データの質的分析は，現代の心理学研究法の中でも注目される方法論である。本章は宗教心理学における質的研究の見本となるであろう。

第 3 章は「日本の中で『信仰』に生きる人々　－あなたの知らない世界？」と題されて，心理尺度を用いて信仰をもつ人ともたない人との心理的な特徴が検討された。研究法としては，質問紙によるオーソドックスな量的研究である。この研究で注目すべきことは，大規模な調査が行われ，キリスト教，仏教，神道の宗教教団から 2000 人以上の大量のデータが収集されたことである。これだけの大量なデータに基づく宗教心理学の研究は，しかも特定の宗教団体に所属している人のデータをこれだけ大量に収集した心理学的研究は，おそらく日本では初めてであろう。統計的な解析から明らかにされた結果はどれも興味深いものである。例えば，信仰をもつ人の数は女性の方が男性よりも，高年者の方が若年者よりも多い。そして就労，結婚，出産，死別経験などの人生経験を深めることによって，信仰をもつ人の数が多くなると指摘している。宗教間の比較では，仏教は両親の影響が大きく親から信仰を継承する人が多い。キリスト教は反対に親からの継承が少ない。「宗教観尺度」の各因子にも宗教間の違いが表れる。キリスト教では「教義」「信仰」の要素が高くなるが，仏教と神道では「民族」「儀礼」の要素が高くなる。宗教に対する態度は宗教間で異なるのである。プロテスタント的な価値観では，教祖や先人が説いた教義を信仰することが，宗教の本分であるとされている。しかし，このような価値観に縛られたままで研究を行えば，宗教の本質を見誤ることになると本章は警告する。欧米の宗教心理学研究は，こういったプロテスタント的な価値観を多分に含んでいると思われる。「宗教観尺度」にみられるキリスト教と仏教・神道との違いは，この警告が真実であることを裏づけるものである。本章は質問紙調査の結果に基づいて統計的な検討が行われ，有意義な示唆が得られたのだが，検定結果については，有意差の有無だけではなくて効果量も併記しておくのがよ

いであろう。これは他の章も同様である。

第 4 章は「『こころの健やかさ』から見えてくる日本人の宗教性 ―より良く生きるために宗教は必要か？」であり，宗教と精神的健康(well-being)との関連が検討された。第 3 章と同様に，大規模な調査による多量のデータが収集されているのだが，この研究のユニークなところは，さまざまな群を用意して「こころの健やかな人」のイメージの比較を行ったことである。さまざまな群とは，公立の中高生や一般の大学生・成人，キリスト教系の私立学校の生徒，宗教系私大の学生，キリスト教・仏教・神道の信者と指導者などである。公立学校の中高生と一般の大学生・成人との間には明確な違いはなく，彼らは「他者への気遣いや思いやりを持ち，明るく，にこやかで優しい人」を「こころの健やかな人」とみなしているそうである。このイメージからは，現実対応がよくできて，生活環境にうまく適応して，生活を楽しく過ごすという人物像が想起される。そして，そこには，自己の存在価値や人生の意味などの実存的な問題に関する悩みが生じにくい可能性を指摘している。確かに，現代の学生相談では「悩めない学生」の存在が話題になっており，経験上，心理的な葛藤を語ることができない学生は思いのほか多い。現代の若者に実存的な悩みが生じにくいという指摘は概ね妥当であろう。しかし，さまざま宗教教団や宗教系の学校では，「こころの健やかな人」のイメージが現代の若者とは異なっており，宗教ごとに教義や聖典に基づいた人物像があり，宗教はその理想像に成長する指針となりうる可能性のあることが示された。つまり宗教が人間としての成長を促し，こころの健やかさを促進するのに多少なりとも寄与していることをこの章は示している。

第 5 章のタイトルは「自然体験の中での宗教心 ―宗教性の一指標として」である。この章のテーマは宗教的自然観である。宗教的自然観とは，自然の中で生じてくる宗教的な認識や感情のことを指す。宗教的自然観には自然に対する認識（対自然認識）と自己存在に対する認識（対自己認識）とがある。この宗教的自然観の体験について自由記述による回答を求め，質的なデータをカテゴリーごとに分類して，さまざまな群で比較を行った。結果は，中学生から大学生までは約 3 割が宗教的自然観を体験しているが，6 割は体験がないと回答した。しかし一般成人になると体験の割合が 6 割に増加する。人生経験を重ねると宗教的自然観を体験する割合が大きくなると考えられる。宗教的自然観に関する体験を分類すると，「自己存在の在り方への気づき」と「生命認識」との二つに大別されるようで，中学生と高校生とを対象に体験内容の比較も行っている。さらにテキスト・マイニングによって自然体験に関する記述内容の分析が試みられた。その結果，回答者の宗教的自然観の典型的な特徴として表れるのが，自己の存在様式の気づきであるが，それは大自然の中でいかに自分が小さい存在であるかという対自己認識と結びついている。こういった言語データの分析は，現在の心理学で注目されている技法である。宗教的自然観などに関する議論は，今までは哲学的，観念的な議論に終始する傾向が強かったが，この章では質的研究の手法によるエビデンスに基づいたデータが提示されており，そのうえで宗教的自然観の心理学的機能が論じられている。そして従来の指標に代わる新たな宗教性指標として，宗教的自然観を用いることが提案された。

第 6 章は「日本文化の中で生きている『神道ナラティブ』 ―身近すぎて気づけない存在」である。「宗教はナラティブである」という前提のもとに，神道の立場に立ったナラティブ・アプローチの視点で日本人の宗教性が論じられた。本章によれば，特定の社会文化の中で多くの人たちに共有されていて，「常識」として人々を支配している言説を「マスター・ナラティブ」という。日本人のメンタリティとして表れるマスター・ナラティブを探っていくと，神道の思想に行きつく例が多い。その典型が「水に流す」という表現である。本章では「水に流す」の他に，「集団主義」と「言挙げせず」とが例示されている。これらのナラティブは神道の思想に基づくものであるが，日本人の深層に深く刻み込まれていて，我々の日常生活や意思決定に大きな影響を与えている。本章では「縁結び」というナラティブを神道に基づくナラティブとして調査対象にしている。調査対象は神道の指導者と信者である。調査内容は「御神徳を感じたこ

とがありますか」という質問で，感じたことがある人にはその体験内容を記述してもらい，さらにインタビューを行った。信者や指導者が感じた御神徳の内容は，「生命の危機から守られた体験」が最も多く，次いで「導きの体験」「縁結びの体験」などが続いた。この中の「縁結びの体験」がインタビューの対象となった。語り手の語った内容を読み解いていくと，偶然とは考えられないような不思議な一致がいくつも起こり，それが神徳（御縁）として認識され，縁結びのナラティブが形成される。そのナラティブが形成されるプロセスが明示されており，宗教がナラティブの形成を促すための装置として機能している様子がよく伝わってくる。

第 7 章は「日本人は宗教，スピリチュアリティをどのように見ているのか　－イメージから読み解く日本人の宗教性」で，「宗教イメージ尺度」を用いて，宗教とスピリチュアリティという言葉が日本でどのように捉えられているのかを検討している。「宗教イメージ尺度」には「組織的－個人的」を問う尺度と「軽薄－重厚」を問う尺度とがある。年齢段階別に宗教イメージを検討すると，宗教に対しては，青年期は成人期と老人期よりも，より組織的かつ軽薄なイメージを有していた。スピリチュアリティに対しては，青年期は老年期よりも，より組織的かつ軽薄なイメージをもっていることがわかった。成人期は青年期と老年期との間に位置するのだが，明確な傾向が見いだされていない。若者が宗教に対して組織的で軽薄なイメージをもつのは，若者の宗教離れと関連している可能性が指摘された。またカタカナの「スピリチュアリティ」という言葉が使われたのが比較的に最近のことであるため，現段階では言葉のイメージが揺れており，成人期はその影響を最も受けているのではないかと考察している。宗教とスピリチュアリティという言葉だけではなく，祈り，仏教，坐禅，おみくじなどの 14 の言葉が宗教イメージ尺度によって検討されている。これらの言葉の相互の関連についても，因子分析やクラスター分析などの統計手法を用いれば，より詳細に深く検討することができるのではないかと思われる。分析の仕方を工夫すれば，日本人の宗教性についてより深く知ることができるだろう。それだけ，さまざまな可能性を秘めたデータであるといえる。

第 8 章の題は「『信仰をもっていない』と答える人の信仰の世界」である。本章によれば，日本人で信仰をもっていないと答える人は 62 %である。それは戦後から一貫した傾向である。しかし神仏の存在を肯定的に回答する人は 65%もいる。特定の信仰をもたないと答えても，素朴な宗教的な思いを強くもっており，何らかの信仰様行動をとる人は少なくない。そして何となく神仏の存在を信じていて，神仏に手を合わせるなどの信仰様行動をとるのが日本人特有のメンタリティである。この日本人特有のメンタリティを紹介した後に，Park の宗教的意味システムの理論やサトウの自己物語の発生に関する 3 層モデルなどを援用して，科学では解明できない真理の存在を認めて追及しているにも関わらず，信仰をもたないと答える日本人のメンタリティについて説明している。日本では社会文脈上は宗教組織や宗教人に対してネガティブな印象が強いので，宗教との接触が抑制される。そのために組織的宗教をマクロレベルでの自己物語の文脈に取り込むことが抑制されるのだが，その代わりに「本人を取り巻く微視的文脈に基づいて，独自に宗教様の感覚をメゾレベルで醸成する」という説明は説得力がある。特定の信仰をもたないというのに，スピリチュアルなものに惹かれる日本人のメンタリティがよく説明されており，腑に落ちる思いがした。日本ではスピリチュアルブームなどが起こったが，既存の宗教的な意味合いを排した形での「神様」概念は，日本においては言説的に利用可能な状態にあるという指摘も納得のいくものである。日本人の宗教性を理解するうえで非常に有意義な章であるといえる。

第 9 章は「スピリチュアリティを心理学する －spirituality に混在する『厄介さ』と『可能性』の探究」で最後の章となる。この章では，まず歴史的な文脈を踏まえたうえでスピリチュアリティの概念的な説明を行い，欧米と日本でのスピリチュアリティ研究の動向に言及している。日本では欧米に比べて研究数が少なく，臨床研究に偏っている。欧米では数年ごとに基礎研究と応用研究とが交互に主流になっている。つまり，欧米では概念の見直しが頻繁に行われ，それにともなって新

しい定義に基づく応用研究がなされるのである。日本でも堅実な基礎研究を充実させる必要性があるといえよう。さらに本章によれば，スピリチュアリティと宗教性との概念的な区別が混然としており，古くから多くの研究では両者の境界が不明確なままにされてきたのだが，最近では差別化を図るための試みがみられるようになってきたという。その一例が，関連団体や専門雑誌で「スピリチュアリティ」と「宗教性」とを並列表記することに表れている。

このようにスピリチュアリティを科学的な概念として扱うことには「厄介さ」がともなうのであるが，近年，スピリチュアリティだけに焦点を当ててその概念構造を探ろうとする試みもなされてきた。その試みの一つとして，スピリチュアリティの理解の違いを日米間の成人で比較しており，本章はその結果を紹介している。興味深いのは，日本では世代間で差がみられるのだが，アメリカでは世代を問わず一定の傾向が認められたことである。またアメリカ人はスピリチュアルで宗教的な人になりたいと望んでいるのに対して，日本人にはその傾向がそれほど強くないことである。こういった日米間の違いが多くみられ，スピリチュアリティに対する認識の差が大きいことがわかる。アメリカではスピリチュアリティという言葉が広く浸透しているのに対して，日本では使われ始めたのがごく最近のことであり，マスコミなどの影響によってオカルト的概念として解釈された。この章では，今後は日本独自のスピリチュアリティと本来の「spirituality」との妥協点を見出すことの重要性を説き，宗教性との概念的差別化も不可欠だと指摘する。そのためには宗教心理学においても「宗教とスピリチュアルの心理学」というように，スピリチュアルという言葉を前面に出すことを提案している。日本では，スピリチュアリティについては誤解と偏見が多い。本章は，このスピリチュアリティの「厄介さ」について客観的なデータと文化的比較とをとおしてよく伝えている。

本書の第 1 章から第 9 章までは，いずれも多様な心理学の研究法を用いて採取されたデータに基づいて日本人の宗教性を論じている。日本人の宗教性は，もっぱら哲学，宗教学，文学などの分野によって論じられてきたのだが，これだけの膨大なデータに基づいて，科学的な検証をとおしたうえで日本人の宗教性を論じた本は本書が初めてであろう。日本で宗教心理学が停滞していた原因として，当然，日本の宗教的風土の複雑さや心理学の歴史的な経緯の問題などさまざまな要因があるのだろうが，心理学的な方法論に基づいてデータをとおして科学的に宗教を検証した本が今までに出版されなかったことも大きな理由の一つであるといえよう。日本人の宗教性を卒業論文のテーマにしたいと言う学生がたまにいるが，今までに推薦できるような本がまったくなかったのである。本書は『宗教心理学概論』と並んで，宗教心理学に関する格好の入門書となり，日本の宗教心理学研究の端緒を啓くことになるだろう。本書を読めば宗教心理学についての具体的な研究方法が例示され，研究のヒントとなる。そして研究知見が蓄積されれば，日本人の宗教性に対する理解が深まり，今後，日本の宗教心理学研究が活発になることが期待される。本書は，日本の宗教心理学研究の新たな可能性を秘めているといえる。

「宗教を心理学する」から宗教心理学を考える

渡辺俊彦（上馬キリスト教会・児童養護施設東京育成園）

現代は宗教多元主義の時代といわれる。宗教多元主義の時代こそ，尚「宗教とは何か」という定義は複雑だともいえる。宗教多元主義と一言でいっても何を意味しているかである。宗教多元主義といえばジョン・ヒックである。彼の主張に耳を向けてみたい。ジョン・ヒックは福音派の教会員であった。その彼は，後に牧師となりバーミンガムで 12 年間教会に仕えた。この 12 年間の期間，ヒンズー教，シーク教，イスラム教，ユダヤ教など様々な人々と接したのだ。そこで，「全ての人間は究極的実存者」によって生かされているという確信に至ったというものである。ジョン・ヒックにとって究極的実存者なる神とは「光と生命の根源である」ということだ。この神を中心に諸宗教は展開しているとする理解に至ったというものである。ジョン・ヒックにとって，それぞれの宗教は究極的実存者に対する応答だとするのである。しかも，それぞれの応答は，それぞれの文化的文脈の中で形成された象徴的概念であるというものである。そして，彼はそれぞれの宗教的立場を「排他主義者」「包括主義者」「多元主義者」の三つに分類した。この内容に関し一つひとつの検討は避ける。宗教多元主義は，救いの道が多元的（多様性）であることを承認する立場である。この理解こそ，日本人の特徴であるシンクリティズムと非常に重なる。

「宗教を心理学する」は，日本人の宗教多元主義的な宗教性を帰納的に心理学の視点で論じようとする試みと理解したい。本書を全体的に概観すると日本人の特徴であるシンクリティズムを裏付けている。それは，宗教多元主義と重なる。本書は，日本人の多くが「あなたの宗教は」という問いに対して「信仰をもっていない」と回答している点にふれている。しかも，「信仰をもっていない」と回答していながらも「宗教にまるわる事柄」に対しての関与・傾倒が見られると指摘している。この行動は，日本人の一般的な宗教行動である。それは，単に日本人の宗教行動というよりも，無意識的で内的自己矛盾を含んだ宗教行動というべきものである。なぜなら，シンクリティズムの特徴を有しているためである。

さて，本書では宗教性を「個人における宗教への関与・傾倒の程度を示す概念である。すなわち，宗教性とは『個人がどの程度宗教に関与しているのか』を測る指標であり，個人が宗教についてどの程度，『信じるのか，感じるのか（宗教意識）』『振る舞うのか（宗教行動）』を表している。」（ 5 頁）と定義している。つまり，日本人の宗教的背景を踏まえながら，個人が宗教に対する関与がどの程度傾倒しているかという宗教行動を測ろうというものだ。また，信仰のレベルまでも測ろうとしている。これらのことを踏まえると，大前提として宗教の定義が大切であろう。そこで簡単に宗教の定義を整理してみながら宗教性について考えることとする。

1．宗教の定義と宗教性

宗教の定義については，近代になり激しい論争が繰り広げられてきた。それだけ，宗教をどう定義するかによって宗教関連の研究の範囲や枠組が決まってくるということであろう。つまり，西洋的な宗教の定義に軸を置くのか。あるいは，東洋的な宗教の定義に軸を置くのか，によって相違が生じるからだ。私は，本書の内容について違和感を感じてしまう。その原因は，西洋的な枠組と東洋的な枠組を相対化し宗教性を論じている点にある。それだけに，宗教を定義したうえで宗教性を論じることが重要だと考えるからだ。しかし，様々な諸宗教の内容を吟味すると，宗教を簡素に定義しようとすることは乱暴といえるかも知れない。 A.E.マックグラスは，宗教の定義について「宗教の定義が中立であることは稀で，しばしばその人が同情する信条や宗教制度には好意的であり，敵対するものには厳しくする，ということが生じるからである。宗教の定義はしばしば個々の学者の特別な意図や偏見にもとづいている」と指摘している（「科学と宗教」 38 頁）。つまり，学

者の数だけ存在するのが現実であるということだ。これらのことを踏まえながら宗教の定義を整理したい。

世界宗教事典によれば,「宗教とは, 超越的存在(神, 仏, 法, 原理, 道, 霊など)についての信念, 超越的なものと個人の関係, 超越的なものに対する個人の態度(信仰など), 信仰に基づいた活動(礼拝, 巡礼など), 組織・制度(教会, 寺社制度など), 信者の形成する社会, 施設(教会堂, モスク, 寺院など)等々」と定義されている。それに対して, 広辞苑では「神または何らかの超越的絶対者あるいは神聖なものに関する信仰・行事」としている。キリスト教神学事典においては「宗教とは見たり触れたりすることのできるものを超えたところにある何らかの超越的実存を指し示す語である」と定義している。また, キリスト教神学事典の定義と類似性があるであろう境界線の神学者ポール・テリッヒは, 宗教を「人間が究極的な関心を寄せる対象」としている。

これら宗教の定義に共通している言葉は,「超越的存在」「超越的」「超越的絶対者」「超越的実存」である。この「超越的～」は人間にとって絶対他者である。 宗教とは Religion と書く。この言葉の re は「再び」であり, lig は「繋ぐ」の結合語である。すると, 宗教とは「人間と超越的存在(絶対他者)と再び結びあわせるもの」ということになる。つまり, 本来人間と超越者が結び合わされていたものが何らかの原因によって分離したということだ。その分離した人間と超越的存在(絶対他者)と再び結びあわせるものが宗教ということになる。そうすると, 諸宗教の制度や儀式は超越者(絶対他者)と結び合わせるための方法論ということになる。こうしてみると, 宗教の構造は縦構造ということである。

本書において,「宗教を心理学するとは, どこまでも『人間の営み』にのみ焦点を当て, どこまでも『人間の営み』のみに依拠し続け, その立場から研究・調査を行っていくものなのである。」(15 頁)とある。宗教を心理学するとは, 宗教性である「人間の営み」こそ超越的存在(絶対他者)に向かう宗教行動などを対象とするということになる。ところが, 本書の第二章で「三木(2001)は『宗教(religion)』という言葉の語源は, ラテン語の「再び繋ぐ」(re-ligare)という言葉にあると述べているが, テラダさんは亡くなった娘さんと自分自身を, ヤマダさんは遺された人々同士を『再び繋ぐ」ための儀式として, この法要を位置づけていることがうかがえる。」(56 頁)という記述がある。これは, 亡くなった方々を超越的存在(絶対他者)とした理解でないことは明らかである。むしろ, その理解は生き残った者と亡くなった者が再び繋がるという横の構造, あるいは横の線で宗教行事及び宗教性を捉えているということである。上記の縦構造としての宗教の定義からすると第二章の内容は成立しないことになる。しかし, この横の構造こそ日本的宗教構造の特徴のひとつであり日本的な宗教性ということになる。その意味で, 宗教行動に伴う宗教性が顕著に表れるのが宗教儀式ではないであろうか。そこで, 宗教儀式にみる宗教行動と宗教性について検討してみたい。

2. 宗教儀式にみる宗教行動と宗教性

宗教儀式には, 一定の型と順序がある。それは, いつ, 誰が, どのように行うか, という定まった決まりである。その一定の型に対する順番こそひとつの宗教行動である。例えば, 日本人の慰霊という宗教儀式に伴う宗教行動について本書で「慰霊とは結局のところ『記憶』と「忘却』という両義的な儀礼なのである」(42 頁)とある。つまり, 慰霊という宗教儀式に伴う「記憶」と「忘却」の関係性に宗教性をみているということであろう。宗教性は「人間の営み」とすると, 宗教的な通過儀礼や個々の宗教儀礼の中に宗教心理学の可能性をみるということである。

また, 本書には「人生経験の深まりは, 個人の信仰の発露と少なからず関連があるように思われる。・・・すなわち, 結婚を経験したり, 子どもがいたりする人のほうが, 信仰をもつとする人が多い。人々は, 就業, 結婚, 出産, 育児において, 人生の喜びの時を味わうのと同時に, 人間関係や社会関係の変化の中で不安や苦しみ, 葛藤や挫折を経験する。さらに加齢とともに身体も変化し, 身近な人の死に直面する機会も増えていく。」(70 頁)とある。人間のライフサイクルにおける

変化，人生の何らかの変化が動機となり宗教行動へと駆り立てるということであろう。

人間のライフサイクルにおける通過儀礼に関して，別名「人生儀礼」ともいわれる。それは，人間は発達段階に応じて人生の境目に営まれる儀礼が存在するからだ。具体的にいえば，誕生祝い，七五三（お宮参り，幼児祝福式など），成人式（昔は元服式），結婚式，出産祝い，葬儀などが該当するであろう。このような，通過儀式にはそれぞれの文化や地域性によって相違があるものの宗教行動が伴う。

特に，顕著に見られると思われる儀式のひとつは成人式であろう。この成人式は，原始宗教や古代宗教に必ずみられる。それだけ，重要な儀式ということだ。一般的に成人式は，子どもが思春期を通過して成人となり一人前の人として社会に迎えられる儀式だ。この成人式は「隔離」「移行」「統合」と順番を踏む。

隔離は，養育者の元から離れ独立することだ。隔離は，養育者との関係に変化が伴う。それだけに，巣立ちしていく不安や将来に対する期待などが伴うものである。人間の人生にとって大きな節目である。

移行は，大人となった証しとして民族の伝承を受け継いだり，タブーや何らかの苦行を課せられる。これらの苦行を継承して大人として昇格する儀式である。これは，社会的立場や役割の変化であり，文化的文脈や生活の座によって相違がある。

統合は，隔離から移行を経験し社会の一員として承認され存在理由や存在価値が位置づけられる（社会的アイデンティティ）。これが，子どもの社会から大人の社会へと統合されるという意味である。当然であるが，一連の通過儀礼の順序に文化的な文脈（地域性）によって相違があるものだ。にも関わらず，一般的に通過儀礼は，神や仏や聖なるものに向かって，聖なるものの前で執り行われる。このように，ライフサイクルにおいて執り行われる成人式は，子どもから大人への変化という意味でアイデンティティの危機でもある。

もう一つ代表的な儀礼として葬儀に見ことができるであろう。ファン・ゲネップは，「儀式を死などに伴うアイデンティティの危機と結びつけて観察し，『通過儀礼』には三つの次元があることを発見した。すなわち，「分離」(separation)「移行」(tuansition)「再統合」(reincorporation) の各次元である。」（牧会としての礼拝　129 頁）としている。

分離は，愛する者との別離である。そこには，分離に伴う喪失感情の反応としての悲しみと痛みが生じる。この喪失感と悲しみを受容し乗り越えるための過程が儀式である。そのため宗教的儀式は，可視的な形で執り行われ悲しみを受け入れるために大切な「悲しみの路程」となる。

移行とは何か。愛する者を失った者が悲しみと痛みの直中にある時，時間が止まってしまたような感覚になることが少なくないといわれる。このような感覚について人類学者ヴィクター・ターナーは「限界状況」(limality) と呼んだ。この状態は，愛する者を失った者にとって人生の重要な試練である。地上に残された者は，愛する者を喪失した試練を通して「生とは何か。」「死とは何か。」「死の意味とは何か。」など実存的な問いが生まれることが少なくない。この実存的な問いがスピリチュアリティである。本書に「敬虔なキリスト教徒と無宗教のふたりの評価者が質的分析を行った結果，回答者の多くが，人生における辛い経験が一つのスピリチュアルな転換期になったこと，また，個人の宗教との関わり度合いがスピリチュアリティを定義する重要な要素になっていることがわかった。」(187 頁）とある。この場合，「（高齢者にとって）宗教的意味合いの深い言葉であることがわかった。」(187 頁）とある。しかも，「宗教はスピリチュアリティに必要であるが，十分な要素ではないということを示唆している。」(187 頁）とも指摘している。これらの理解には，反論があるがここでは避ける。しかし，実存的な問いはスピリチュアリティの覚醒と深く関係しているということであろう。

さて，キリスト教会の場合，葬りの儀式は共同体的礼拝行為である。その礼拝行為を通して真に適切な意味のある言葉と出会うのである。それは，礼拝行為を通してに超越的存在（絶対他者）との対話を可能し実存的な問いに明確な答えを見出すことが少なくないものだ。本書には「宗教的意味システムは，受容にとどまらず，現象の背

後にあるよりも真なるもの，たとえば神の意図との対話／解釈を行う。」(169 頁)とある。この宗教的意味のシステムの内容に該当するしているかも知れない。いずれにしても，移行の期間は，自分自身と向き合い対話する大切な時間ということである。

再統合は，愛する者を失ったことによって限界状況となり非日常的状態から日常へと回復することを意味する。再統合は，単に非日常から日常を取り戻すだけではなく，新しい人生が始まるということでもある。キリスト教会で執り行う葬りの儀式である共同体的礼拝行為の過程を通して，愛する者の死を受容すると共に新しい人生の出発の準備ともなる。その結果，喪失感の反応としての悲しみや痛みは，「生産的な出来事」となりうる。そして，新しい生に向かって生きる力ともなる。

こうして，分離，移行，再統合の過程を経て日常へと新しい生が始まるのだ。本書の「科学的意味システムや自然的意味システムは『なぜ私が存在するのか』『なぜほかの人ではなく私がこのような目にあうのか』『なぜ私は生きなければならないのか』という問いに有効な答えを与えてくれることはない。子どもに『死んだらどこに行くの？』と聞かれたとき，あるいは，障害をもって生まれた子どもに『なぜ僕だけ〇〇なの？』と聞かれたとき，明確に説明を与えてくれるのは宗教的意味システムだけである。その理由として，ウッドらは，『了解可能性』(世界についての見方を提示し，それに基づいて世界を理解・予測・対応できる)，『アクセス可能性』(出会う機会が多い)，『超越性』(自分たち以上の大いなる存在にゆだねられる)，『直接的な言明』(人の存在理由について明確にする)という 4 点で，宗教的意味システムは他の説明システムよりも突出して包括的意味を提示するのに優れているからである。」(170 頁)とある。この文章の中にある問いも実存的な問いである。その実存的な問いに答えることができる機能があるということだ。まさに，宗教性は，この宗教的意味システムの枠組の中で分離，移行，再統合の過程において機能していると考えられる。以上のことから，人間は宗教及び宗教性を否定できない存在だということである。

3. まとめ

宗教心理学を考えることは大変難関である。なぜなら，様々な領域が複雑の絡み合っているからだ。しかも，様々な宗教を一般化し相対化しているため本来の意味と相違が生じている点があるためだ。全体を通して宗教性はひとつの心の作用と考えられる。その心の作用に関してパスカルの言葉を引用したい。パスカルは「神を直感するのは心であって，理性ではない。信仰とはそういうものなのだ。理性ではなく，心に感じられる神」と心の作用に関して言及した。そこで，パスカルが指摘する「神を直感する心」「心に感じられる神」に向かう心の作用が宗教性であると理解したい。その心の作用は，様々な宗教儀礼に伴う宗教行動などにみられる宗教性である。これらを総合的に表現してみると宗教性は「神超越者(絶対他者)に向かう垂直的心の運動であり，自己の内に向かう心の運動であり，世を去った者に向かう心の運動」ということであろう。本書で扱っている宗教性はそういう心の運動ではないか，ということだ。また，日本人の「無宗教」は「無宗教という宗教」という点を数値によって明らかにしたことは意味がある。これらの宗教性という心の運動を帰納的に，心理学的視点で調査，研究することが宗教心理学の可能性と理解したい。

事務局からのお知らせ

宗教心理学研究会ニューズレター第 25 号が発行されました。今回ニューズレターでは，2016 年 7 月に刊行された『宗教を心理学する』の特集を組ませていただきました。一つが「出版記念パーティー」，もう一つが「書評」とそれぞれ違った角度から『宗教を心理学する』を味わっていただきたいとの思いです。

ニューズレターを始め，これからも研究会に対する会員の皆さまからのご意見，ご感想をお待ちしております。(K.M)

[宗教心理学研究会の今後の予定]

2017 年 2 月

宗教心理学研究会ニューズレター第 26 号の構成・編集作業

2017 年 3 月

関東地区第 9 回研究会　開催予定

第 12 回関西地区勉強会　開催予定

第 14 回研究発表会(日本心理学会第 81 回大会[於：久留米大学]公募シンポジウム)の検討

2017 年 3 月末頃

宗教心理学研究会ニューズレター第 26 号発行(予定)

発行：宗教心理学研究会
編集：宗教心理学研究会事務局

研究会事務局
担当：松島公望[psychology-religion@office.so-net.ne.jp]
研究会ホームページ管理・運営
担当：クリーグ波奈[psych.religion.web@gmail.com]

研究会ホームページ
http://www.geocities.jp/psychology_of_religion_japan/